

岐阜県文化財保護センター  
調査報告書 第158集

# 六 里 遺 跡 Ⅲ

2023

岐阜県文化財保護センター

ろく  
六 里<sup>り</sup> 遺 跡 III

2023

岐阜県文化財保護センター



## 序

大野町は濃尾平野の北西部に位置し、北は濃尾平野の縁辺を成す丘陵、東西は根尾川と揖斐川の両河川に挟まれています。町内には、国史跡野古墳群や県史跡上磯古墳群などの著名な古墳群が所在し、古代の景観を色濃く残す条里地割などが展開するなど、数多くの歴史的な遺産に恵まれています。

このたび、岐阜県揖斐土木事務所が行う県単道路新設改良事業に伴い、大字小衣斐に所在する六里遺跡の発掘調査を行いました。六里遺跡では、平成24年度に大野町教育委員会、平成26年度、平成29・30年度に当センターが調査を行い、今回が5度目の発掘調査となります。これまでの調査では、縄文時代晩期の土器埋設遺構や、古墳時代後期から古代にかけての集落跡、中世以降の条里地割に関わる溝状遺構や畦畔などが見つっていますが、今回の調査でも、古墳時代後期から古代に機能したと考えられる掘立柱建物や溝状遺構を確認しました。

今回の調査によって得られた資料は、これまでの調査資料と合わせて大野町の歴史を考える上で様々な示唆を与えてくれるものと思います。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史的研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、大野町教育委員会、地元地区の皆様には深く感謝申し上げます。

令和5年3月

岐阜県文化財保護センター

所長 岡田 知也

## 例 言

- 1 本書は、岐阜県揖斐郡大野町小衣斐に所在する六里遺跡（岐阜県遺跡番号 21403-11403）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、県単道路新設改良事業主要地方道岐阜県南大野線下礪～麻生工区に伴うもので、岐阜県県土整備部揖斐土木事務所から岐阜県文化財保護センターが依頼を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 宇野隆夫帝塚山大学客員教授の指導のもとに、発掘作業及び整理等作業は令和3年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第1章～第3章を服部正宏、第4章を三輪晃三が行った。また、編集については両名が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。  
岡田勝幸、竹谷勝也、渡邊博人、大野町教育委員会
- 9 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。
- 10 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 11 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

# 目 次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	14
第1節 基本層序	14
第2節 遺構・遺物の概要	16
第3節 遺構・遺物	20
発掘区全域図、遺構一覧表、遺物観察表	
第4章 総括	39
報告書抄録	

## 挿図目次

図1	遺跡位置図	1	図14	SK15～SK17 遺構図	22
図2	試掘調査坑と本発掘調査範囲	2	図15	SD 1 遺構図・出土遺物実測図	23
図3	グリッド設定図	3	図16	SD 3 遺構図・出土遺物実測図	25
図4	大野町の地質図 (山地)	7	図17	SK 1 遺構図・出土遺物実測図	25
図5	大野町の地質図 (平地)	7	図18	遺物包含層出土遺物実測図 (1)	29
図6	過去の調査位置と条里遺構分布図	9	図19	遺物包含層出土遺物実測図 (2)	30
図7	六里遺跡周辺の遺跡	12	図20	遺物包含層出土遺物実測図 (3)	31
図8	発掘区北壁の土層断面	15	図21	遺物包含層出土遺物実測図 (4)	32
図9	遺構分類模式図	17	図22	発掘区全域図	33
図10	須恵器坏蓋の分類	18	図23	掘立柱建物の柱掘方の規模	39
図11	須恵器坏身の分類	18	図24	古墳時代後期から奈良時代にかけての土地 利用状況	41
図12	SB 1 遺構図	21	図25	竪穴建物の長軸方位	42
図13	SB 1 出土遺物実測図	22			

## 表目次

表1	試掘・確認調査結果	2	表9	掘立柱建物付属遺構一覧表	34
表2	周辺の遺跡一覧表	13	表10	溝状遺構一覧表	34
表3	平成 29・30 年度調査との対応関係	14	表11	土坑一覧表	34
表4	遺構検出数	16	表12	出土遺物観察表 (1)	35
表5	出土遺物一覧表	17	表13	出土遺物観察表 (2)	36
表6	土師器分類別破片数・重量	17	表14	出土遺物観察表 (3)	37
表7	須恵器分類別破片数・重量	18	表15	出土遺物観察表 (4)	38
表8	掘立柱建物一覧表	34	表16	掘立柱建物の属性表	39

## 挿入写真目次

写真1	調査前風景	5	写真4	遺構検出作業	5
写真2	表土掘削作業	5	写真5	遺構掘削作業	5
写真3	遺物包含層掘削作業	5	写真6	遺構実測作業	5

## 写真図版目次

図版1	遺構 (1)	図版4	遺物 (2)
図版2	遺構 (2)	図版5	遺物 (3)
図版3	遺物 (1)	図版6	遺物 (4)

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

六里遺跡は、揖斐川と根尾川に挟まれた扇状地上に広がる遺跡で、揖斐郡大野町大字麻生・小衣斐・六里に所在する（図1）。平成24年度に大野町教育委員会が条里公園造成に伴う発掘調査を実施し、古墳時代から中世にかけての遺構を確認した<sup>1)</sup>。その後、平成26年度に岐阜県文化財保護センター（以下、「当センター」という。）が同遺跡において発掘調査（以下、「平成26年度調査」という。）を実施し、主に縄文時代晩期、古墳時代、中世以降の遺構を確認した<sup>2)</sup>。さらに、平成29年度及び平成30年度にも同遺跡において当センターが発掘調査（以下、「平成29・30年度調査」という。）を実施し、主に古墳時代後期、古代、中世以降の遺構を確認した<sup>3)</sup>。



図1 遺跡位置図（令和2年国土地理院発1:25,000電子地形図「池野」「北方」をもとに作成）



## 2 第1章 調査の経緯

今回の発掘調査は、県単道路新設改良（主）岐阜県南大野線下磯～麻生工区に伴うもので、この事業予定地が六里遺跡に含まれることから、岐阜県揖斐土木事務所（以下、「揖斐土木事務所」という。）から岐阜県知事（以下、「県知事」という。）宛てに試掘・確認調査の実施依頼（令和2年4月30日付け揖土第266号）があり、令和2年5月12日に岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課が、試掘・確認調査を実施した（図2）。その結果、TP1で遺構を検出し、TP1・TP2で土師器や須恵器等の遺物が出土した（表1）。

表1 試掘・確認調査結果

年度	試掘坑 No.	検出遺構 (基数)	出土遺物 (点数)						合計
			土師器	須恵器	灰釉陶器	中近世陶器	石器	その他	
R2	TP1	土坑 (2)	0	1	0	0	0	0	1
	TP2	なし	1	0	0	0	0	0	1

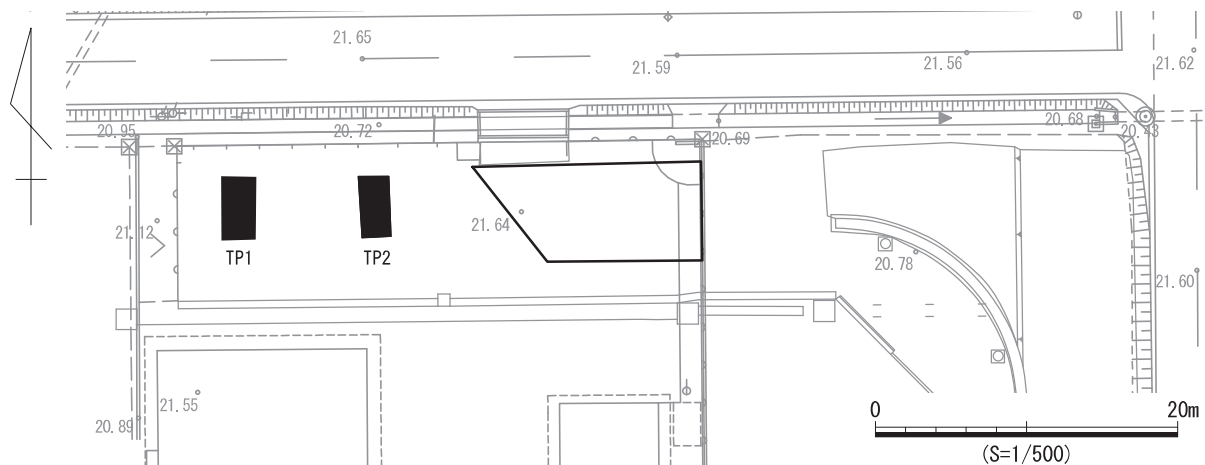


図2 試掘調査坑と本発掘調査範囲図

令和2年8月4日に実施した第1回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、試掘・確認調査で遺構・遺物が確認できた点、東隣で実施した平成29年度調査で確認したSD48（以下、「H29\_SD48」という。）の続きが検出される可能性が高い点等から、本発掘調査が必要との意見がまとめられた。

本工事については、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、揖斐土木事務所長から県知事宛てに埋蔵文化財発掘通知（令和3年2月8日付け揖土第573号）が提出され、同条第4項の規定に基づき、県知事から揖斐土木事務所長宛てに発掘調査実施勧告（令和3年2月18日付け文伝第104号の181）を通知した。揖斐土木事務所長は当センターに発掘調査を依頼（令和3年1月8日付け揖土第539号）し、当センターが実施した。当センターは調査着手後、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく発掘調査の報告（令和3年6月8日付け文財セ第126号）を県知事に提出した。

注

- 1) 大野町教育委員会2013「大野町史跡条里跡（六里遺跡）の発掘調査」『平成25年度岐阜県発掘調査報告会資料』、岐阜県文化財保護センター
- 2) 岐阜県文化財保護センター2018『六里遺跡・稲荷遺跡』
- 3) 岐阜県文化財保護センター2019『六里遺跡Ⅱ』

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

発掘作業は、令和3年度に130.2㎡を実施した。平成29・30年度調査と整合性をもたせるために、世界測地系座標の $X = -59,600$ 、 $Y = -49,000$ を原点とした100m×100mの大グリッドを踏襲し、A～Cの配置もそのまま使用した。今回の発掘区は、平成29年度調査B地点の西側に位置し、Aに含まれる。大グリッド内には、5m×5mの小グリッド（以下、「グリッド」という。）を設定し、南北列にA～Tのアルファベット、東西列に1～20のアラビア数字を付けて併用した（図3）。そのため、発掘区北東隅のグリッドはAN20、発掘区南西隅のグリッドはAP18となる。

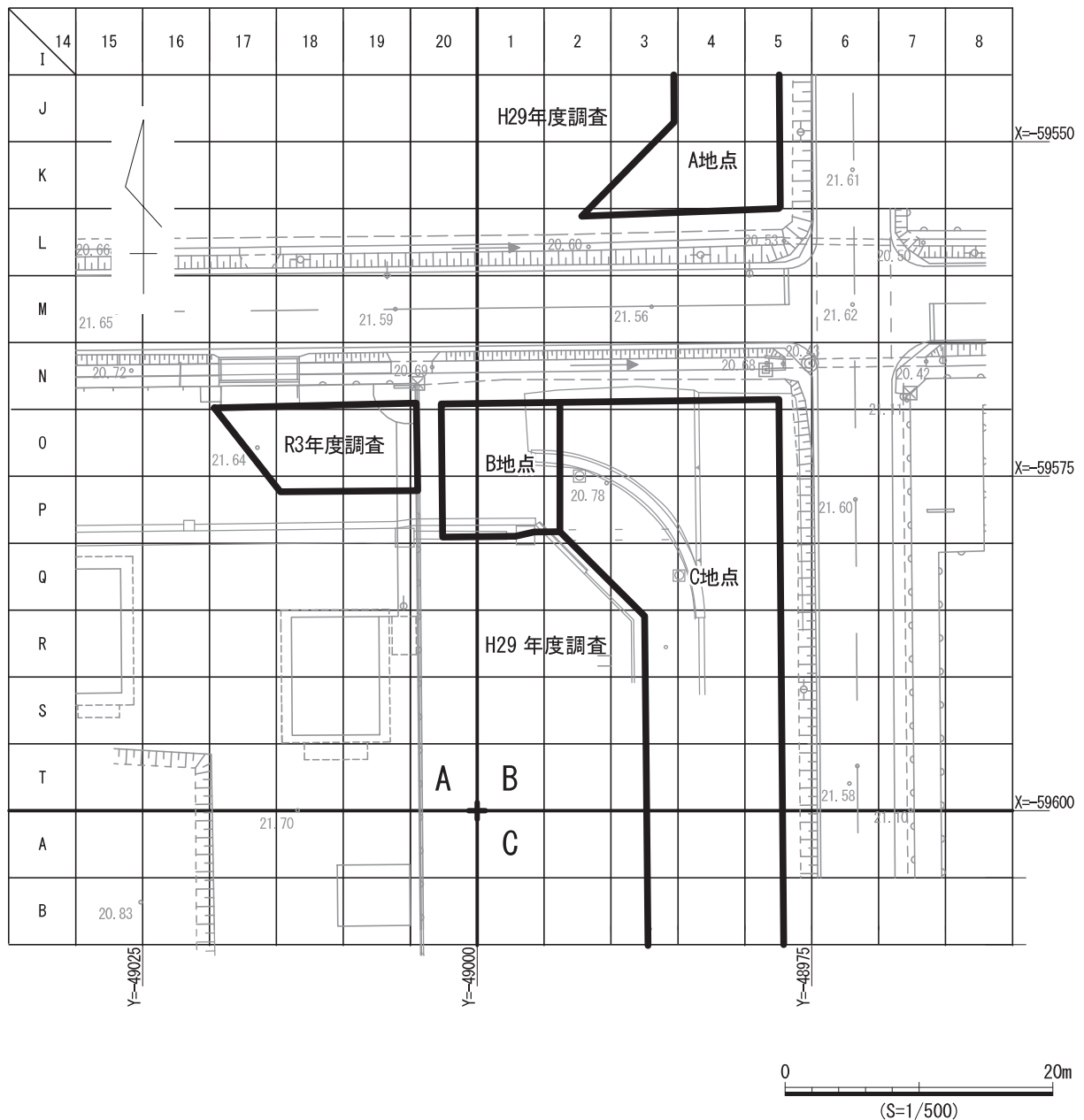


図3 グリッド設定図

#### 4 第1章 調査の経緯

表土等掘削では重機を用いて、遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削ではスコップ・草削り鎌・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構埋土は半截又は四分割して土層堆積状況を観察し、必要な記録を作成した後に完掘した。

遺構検出時に出土した遺物は、原則として層位・グリッド単位で取り上げた。また、遺構出土遺物は半截前後で取り上げ方法を変えた。すなわち、半截前は検出面から約5cm下までをa層、約5cm～10cmをb層、というように遺構内を概ね5cm単位の人工層位として取り上げ、半截後は分層した層位ごとに取り上げた。また、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、出土位置を測定して取り上げた。

遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「遺跡番号（年度の西暦下二桁と遺跡記号RR）」「グリッド番号・遺構名及び掘削位置」「出土層位」「遺物番号」「出土年月日」「遺物種別」を記入し、この記録をもとに遺物台帳を作成した。検出した遺構は原則として検出順に通番を付し、遺構番号は「S001」というようにSと3桁の数字により表記した。この番号は、本書の遺構一覧表（表8～11）に調査番号として記載した。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量、土層断面図は手測り測量にて、それぞれ実施した。図面の縮尺は、20分の1を基本として、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影では、デジタル一眼レフカメラとコンパクトデジタルカメラを使用した。また、発掘区の完掘後に脚立を用いて景観写真撮影を実施した。

## 2 調査の経過

発掘調査日誌から抜粋して、週ごとの調査経過を以下に記載する。

第1週～3週（5/17～6/6） 17日から仮設橋の設置工事及び発掘区舗装版撤去作業等を行った。

第4週（6/7～6/13） 7日に表土掘削作業を開始し、終了した。

第5週～8週（6/14～7/11） 作業を休止した。

第9週（7/12～7/18） 12日に人力による排水溝掘削などを開始した。13日に平成29・30年度調査で第1調査面としていた土層の上面で、南北方向にのびる溝（SD1）を検出した。翌14日にSD1を完掘した。遺物包含層掘削作業は14日から実施し、A017グリッド付近から東に向かって進めた。

第10週（7/19～7/25） 21日にA017・A018グリッドの遺構検出作業を実施し、溝（SD3）を検出した。H29\_SD48の延長線上に位置するため、同一遺構と判断した。

第11週（7/26～8/1） 30日にA019グリッドの遺構検出作業を実施した。A019グリッドからは掘立柱建物（SB1）や溝（SD3の続き）を検出した。

第12週（8/2～8/8） 6日にSD3を完掘した。

第13週（8/9～8/15） 11日～13日は夏期休業により作業を休止した。

第14週（8/16～8/22） 16日～19日雨天のため、作業を休止した。20日に竹谷勝也氏（大野町教育委員会）による現地指導を受けた。

第15週（8/23～8/29） 23日に宇野隆夫氏（帝塚山大学）による現地指導を受けた。25日にSB1を完掘した。掘削作業が完了した。26日に岡田勝幸氏（大野町教育委員会）による現地指導を受けた。同日、景観写真撮影を実施した。

第16週（8/30～9/5） 31日に全体図校正を実施した。

第17週（9/6～9/12） 6日に埋戻し作業を開始し、7日に終了した。8日に一次整理作業を開始した。

第18週（9/13～9/19） 13日に発掘区の舗装版復旧工事及び仮設橋の撤去工事を実施した。

第19週以降 9月29日に一次整理作業を終了した。10月5日に事業者に対し、現地引き渡しを実施した。

遺物実測や挿図作成等の整理等作業は、令和3年度にセンターにおいて実施した。整理等作業時には、令和4年1月21日に宇野隆夫氏（帝塚山大学）に総括に関する指導を、令和3年12月7日に渡邊博人氏に須恵器に関する指導を受けた。



写真1 調査前風景(南西から)



写真2 表土掘削作業



写真3 遺物包含層掘削作業



写真4 遺構検出作業



写真5 遺構掘削作業



写真6 遺構実測作業

### 3 調査体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	岡田知也（令和3年度）
総務課長	布施三千代、中通珠子（令和3年度）
調査担当課長補佐、係長	大本直人、三輪晃三（令和3年度）
調査担当主査	近藤正枝（令和3年度）
担当調査職員	服部正宏（令和3年度）

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

六里遺跡の地理的環境について、以下に述べる<sup>1)</sup>。

当遺跡が所在する揖斐郡大野町は岐阜県の南西部、濃尾平野の北西端部に位置し、揖斐郡揖斐川町、同郡池田町、安八郡神戸町、本巣市、瑞穂市と接する。町域は、東は根尾川、西は揖斐川に囲まれており、東西約5.8km南北約11.7kmで、面積は約34.2km<sup>2</sup>を測る。

大野町の地形は、北部の低山性山地と、町域の大部分を占める平野部に分けることができる。北部の低山性山地は、古生代二畳紀層に含まれ、チャート、砂岩、石灰岩などで構成される。チャートなど浸食・風化の影響を受けにくいところは急な峰をつくり、山腹斜面は急傾斜となる。山地の下部では、岩屑の堆積によって埋没谷となり緩斜面を形成したとされる。

町域の大部分を占める平野は標高約15mから30mで、黒野低台地、氾濫盆状低地、根尾川・揖斐川が形成した合成扇状地で形成される。黒野低台地は根尾川右岸の大野町黒野にみられ新生代第四紀(約200万年前から現代)の最終氷期の時代に古根尾川の働きによって形成された洪積世段丘面である。氾濫盆状低地は、牛洞地区一帯に広がり、町内を流れる三水川は、この低地が集める水を水源としている。合成扇状地は根尾川緩扇状地と揖斐川下位扇状地があり、いずれも河川が運んだ土砂によって形成された緩やかな斜面であり、沖積世に属する。根尾川緩扇状地は、本巣市山口付近を扇頂にして広がり、東は岐阜市黒野、西は大野町黒野の西端を流れる三水川を境にしている。一方、揖斐川下位扇状地は河川が分流し網状流路によって形成されたものである。大野町の集落は、下位扇状地上の旧中州の微高地上に立地する。現況地形も、揖斐川から南東方向に緩傾斜しており、現在の用水路の方向もこれに影響されている。なお、六里遺跡は根尾川緩扇状地と揖斐川下位扇状地の境界付近に位置しているが、六里遺跡周辺の用水の流水方向は西から東へ流れて三水川へと注いでいるため、遺跡は揖斐川下位扇状地上に立地していると考えられる。

現在、六里遺跡が所在する一帯は、昭和39年から60年にかけて行われた土地改良事業により、平坦な景観が広がっている。平成26年度調査では、縄文時代晩期以降に網状流路が埋没し、その後、古墳時代以降の基盤となる土が堆積したことが確認されており、その際に低地や微高地が形成され、現在の集落につながる景観が成立したと考えられている。

#### 注

1) 地質・地形に関する記述は、以下の文献を参考とした。

大熊賢昭1985「第1章 風土と生物」『大野町史 通史編』、大野町

竹谷勝也 2011「第1章 調査の目的と背景」『大野町の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、大野町教育委員会

岐阜県文化財保護センター2018『六里遺跡・稲荷遺跡』

岐阜県文化財保護センター2019『六里遺跡Ⅱ』

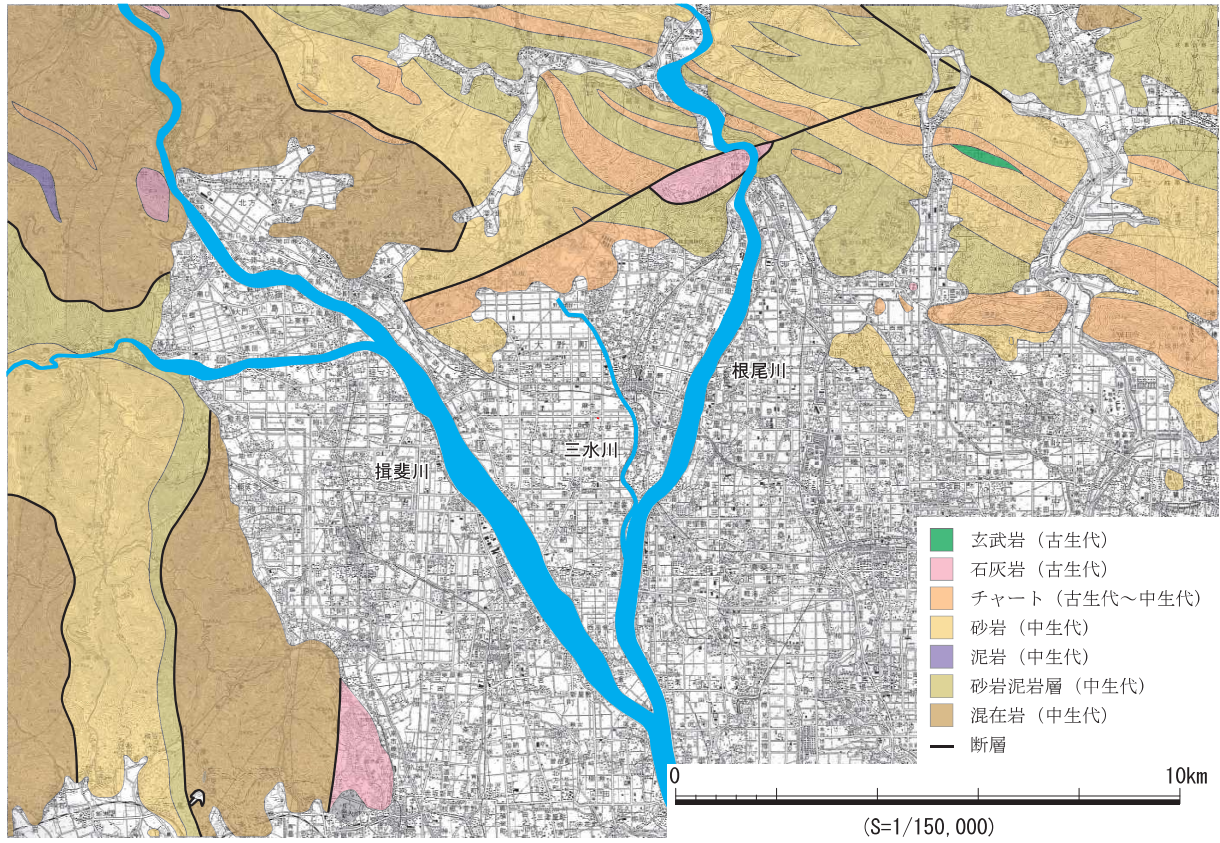


図4 大野町の地質 (山地)

(シームレス地質図V2(産総研地質調査総合センター)をトレースし、平成14年発行国土地理院1:50,000地形図「大垣」に重ねて作成)

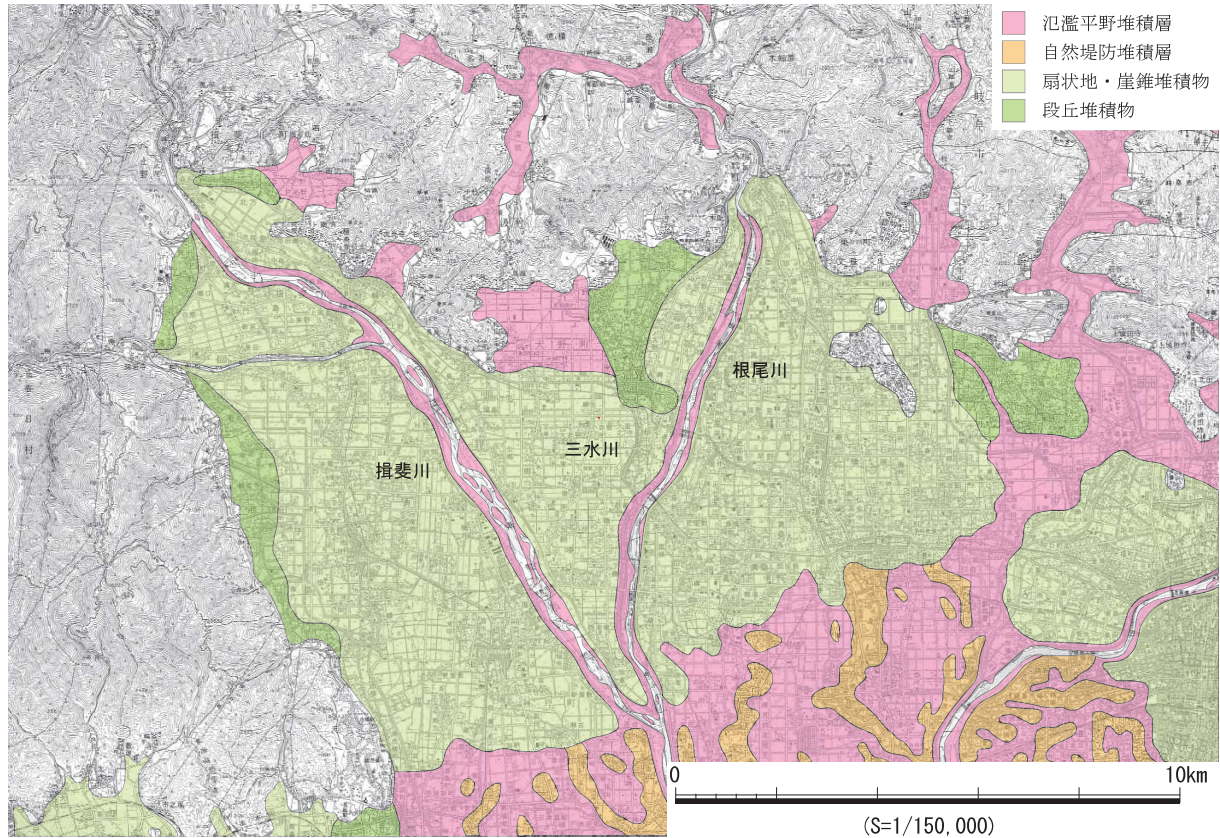


図5 大野町の地質 (平地)

(シームレス地質図V2(産総研地質調査総合センター)をトレースし、平成14年発行国土地理院1:50,000地形図「大垣」に重ねて作成)

## 第2節 歴史的環境

### 1 大野町の遺跡

六里遺跡周辺の主な遺跡について、時代順に概観する<sup>1)</sup>。なお、文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図7及び表2<sup>2)</sup>と一致する。また、六里遺跡(1)については次項で詳述するため、ここでは省略する。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺跡は確認されていない。

**縄文時代** 物干山遺跡(2)やカイト遺跡(3)や姥田遺跡(4)がある。物干山遺跡及びカイト遺跡は、大野町教育委員会が平成8・9年度に調査を実施した。物干山遺跡では、早期末から前期初頭の土器と石器が出土した。カイト遺跡では、中期後葉から末葉の土器が出土し、中期の竪穴建物の可能性がある遺構も確認された。姥田遺跡では、試掘・確認調査で縄文土器が出土した。

**弥生時代** 古くから知られている遺跡に南山遺跡(5)がある。昭和47年、南山古墳(37)の墳丘北側に農業排水路を新設した際、多量の弥生土器片・木製品などが出土した。特徴的なものとしては、ベンガラで赤く彩色されたパレススタイル土器や近江・北陸との関係が指摘されている器台がある。また、法政寺・御屋敷遺跡(6)では高坏、台付甕、赤彩が施されたパレス壺の口縁部などが出土した。その他に、笹山遺跡(7)からも多量の弥生土器片が出土した。

**古墳時代** 上磯古墳群(33)や野古墳群(52)など、町内各所に遺跡が分布する。上磯古墳群は、前方後方墳の北山古墳(36)・南山古墳、前方後円墳の亀山古墳(35)の3基が現存し、この他笹山古墳(34)と3基の小古墳が滅失したことが知られている。文政2(1829)年に亀山古墳から鏡2面(四獣鏡と六獣鏡)、明治42(1969)年に北山古墳から鏡一面が出土した。3面の鏡は昭和49年に県重要文化財に指定された。野古墳群は、5世紀中葉から6世紀初頭にかけて造営された古墳群である。前方後円墳を含む14基もの古墳が互いに接するほど集中して築かれた希有な事例として、昭和32年に国史跡に指定された。現在、9基の古墳が現存し、開墾などで削平されていた8基が発掘調査により確認されている。この他、押ヶ谷山頂に立地し、全長43mの前方後円墳である押ヶ谷古墳(39)やカツラ山古墳(31)等の北部山地に立地する古墳は、古墳時代前期から中期に属すると考えられている。古墳時代後期から終末期にかけて、北部山地等に直径5m~20m程度の古墳が数基から数十基密集して築かれた。平成8・9年度に大野町教育委員会によって発掘調査が行われ、堂ヶ洞古墳群(45)で2基(16・18号墳)、三ヶ原古墳群(43)で3基(3・5・6号墳)、カイト古墳群(30)で37基(7~10・17・19・20・22・36~64号墳)、計42基の古墳の調査がされた。堂ヶ洞古墳群は、16号墳玄室内から7世紀後葉の須恵器(甕・高坏・平瓶)がほぼ完形で見つかり、その他に耳環、鉄鏃も出土した。18号墳玄室内からは須恵器(高坏)が1点出土したのみで、時期は7世紀中葉のものと考えられる。三ヶ原古墳群の5号墳は全長10mを超える大型の両袖型石室を有する。玄室から鉄刀や鉄鏃、金銅製の空玉などが出土したことから、本墳が小首長クラスの墓であったと考えられる。カイト古墳群は7世紀中葉から後葉の古墳群で、7基の古墳内から焼骨が出土した。すべて人骨であり、古墳の墓制を知るうえで重要な遺跡である。この他、根尾川左岸の段丘面に立地する十二塚古墳群(54)などが後期古墳として知られている。集落跡では、古墳時代後期の竪穴建物を検出した姥田遺跡、同時期の溝状遺構を検出した大藪遺跡(11)などがある。

古代 六里遺跡の西に位置する大隆寺跡（58）は、川原寺式軒丸瓦が出土することで知られている美濃地域を代表する古代寺院のひとつである。かつて、水田中に塔心礎及び礎石が露出しており、この礎石を中心に大正13年に「大龍寺廃寺址」として県史跡に指定された。郡家遺跡（29）は、その地名から大野郡郡家に比定されており、古代から中世にかけての遺物が採集されている。また、古代東山道が大野町南端の下磯地区に位置していたことが推定されており、『和名類聚抄』の大野郡13郷の一つである駅家郷及び東山道大野駅が当該地に比定されている。カイト遺跡では、8世紀中頃の火葬墓・火葬跡を検出し、火葬跡から和同開珎が1枚出土した。座倉遺跡（13）は、平成元年度に大野町教育委員会が発掘調査を行い、竪穴建物・掘立柱建物等を検出した。竪穴建物のカマド周辺から、K-90号窯式期の灰釉陶器と美濃須衛窯V期の須恵器が出土した。高見遺跡（16）は、轆轤を使って作成された土師器や灰釉陶器が出土した。また、出土遺物には、転用硯や墨書土器、石帯具があり、いずれも官衛遺跡に特徴的な遺物である。稲荷遺跡（18）は、平成26年度に当センターが発掘調査を実施し、奈良時代から平安時代にかけての集落跡を確認した。大野町は、条里制に基づく土地区画の痕跡が残ることで知られている。圃場整備後の現在でも、条里の基本単位である一町の地割は受け継がれており、町内には条里にちなむ地名として五之里・六里という「里」呼称の地名が残る。大野郡条里

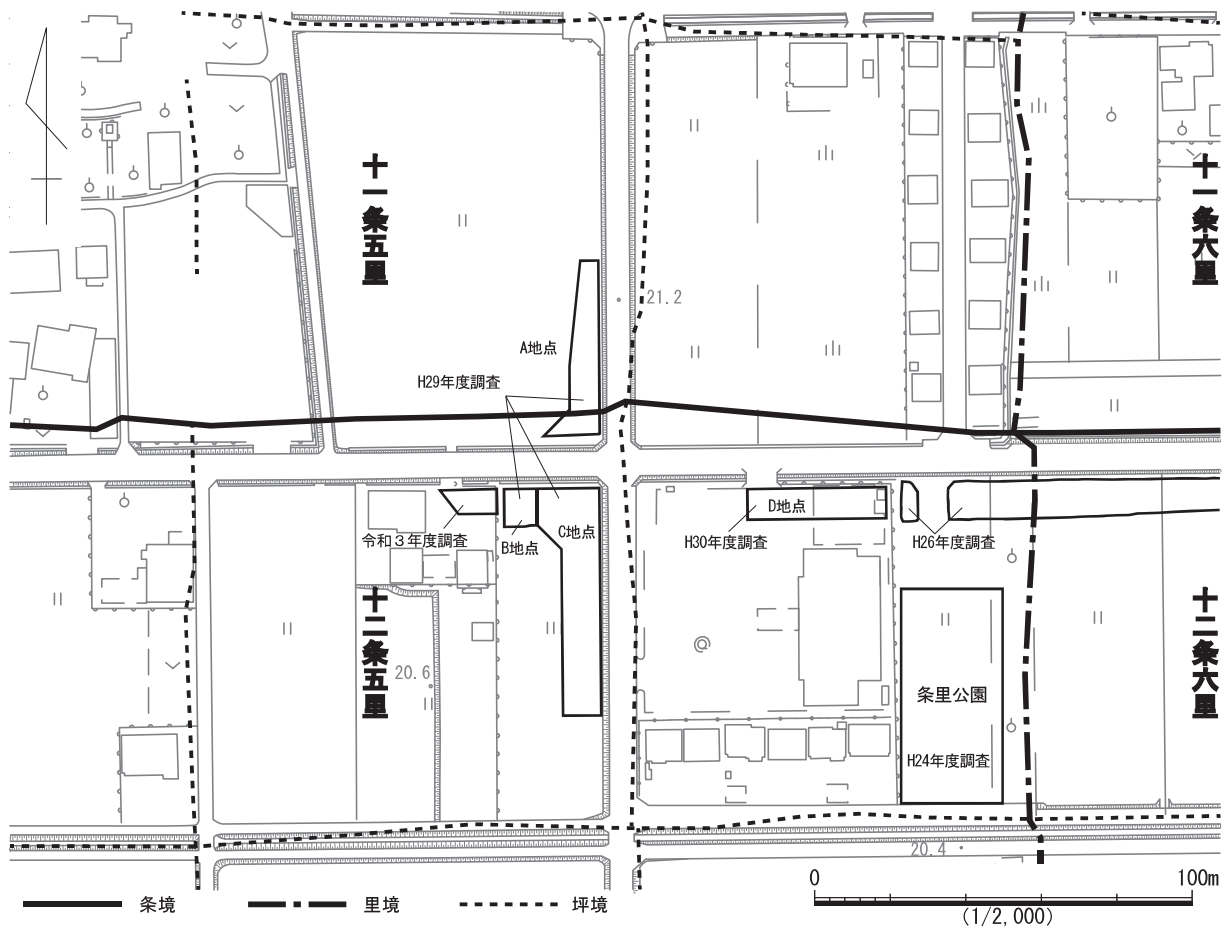


図6 過去の調査位置と条里遺構分布図

(条里遺構分布図は大野町教育委員会2011をトレースして作成)



の復元図を初めて示したのは阿部栄之助氏である。阿部氏は大字五之里の東端と大字六里の西端が南北の同一線上にあることに着目し、ここを里境として東西の割り付けを復原した。南北の「条」については諸説あるが、谷汲村村瀬を1条とする水野時二氏の復原案が現在の定説である。その後、平成23年度に大野町教育委員会が地割復元作業を実施し、条里遺構分布図を作成した。この条里遺構分布図によると、今回の発掘区は十二条五里に該当する(図6)。なお、これまでの調査からこの条里制に基づく区画は10世紀頃施行されたと推定されている<sup>3)</sup>。

**中世・近世** 遺物の散布は多くの遺跡で見られるが、明確な集落跡が確認されているのは、六里遺跡(1)の一例である。この他町内には、中近世の城館や城跡に関する遺構が残る。相羽城跡(62)では、鎌倉初期に土岐光俊がこの地に住み饗庭氏と称した。その後、長屋景興が住んでいたが、天文16(1547)年、斎藤道三に攻められて落城した。その後入城した鷹司政光も織田信長に攻められて翌17年に滅びた。中之元城跡(63)は別名中野城と呼ばれ、土岐成頼の後嗣争いに端を発した船田合戦の主戦場である。方1町を占める字一町田には、北・東に土塁の痕跡らしい地割が見られる。遺跡の周辺では、須恵器・灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸が出土した。上ノ城跡(64)・下ノ城跡(65)は、それぞれ方一町、方半町程度の長方形の城館である。上ノ城は、かつては土塁が残っていたが、宅地開発によって消滅した。下ノ城は、現在も北半が残り、堀の痕跡とみられる凹地が巡っている。織田河内守邸跡(68)は大野町野に所在し、慶長6(1601)年から寛永8(1631)年まで、旧野村ほか1万石を領した織田河内守長孝・長則2代の屋敷跡である。邸跡西の区画は庭園跡といわれ、高さ1mの土塁と深さ1mの水路が現存する。野村藩邸跡(72)は、明治2(1869)年から3年間続いた野村藩の藩邸跡である。約200m四方の周囲には、高さ2mの土塁と幅約4mの塀が巡っていた。

## 2 六里遺跡の調査について

前章に記したとおり、六里遺跡では平成24年度に大野町教育委員会、平成26・29・30年度に当センターが発掘調査を実施した。ここでは、過去の発掘調査の成果を概述する<sup>4)</sup>。

**縄文時代** 平成26年度調査において、縄文時代後期の可能性のある土器が出土した。大野町では、前述のとおり、縄文時代早期～中期の遺物は確認されているが、後期の遺物について確認できたのは当遺跡のみである。また、良好な縄文時代晩期後半の遺物包含層を確認するとともに自然流路に挟まれた中州状の微高地で縄文時代晩期の土器埋設遺構を検出した。さらに、骨片の可能性のある白色粒が出土した土坑等も確認されており、当該時期に墓域を形成していた可能性がある。

**弥生時代** 平成26年度調査において、弥生時代中期～後期の土器が出土した。中期の土器は二次的な流入と考えられるが、大野町で確認された弥生土器では最古のものである。

**古墳時代** 平成26年度調査において、幅3mを超える古墳時代初頭の溝状遺構を確認し、流水の痕跡があることから取水路と考えられる。この時期から当該地の本格的な土地利用が開始された。平成24年度調査では、古墳時代後期の竪穴建物を確認した。その後、当センターが実施した調査においても、古墳時代後期の竪穴建物を複数確認しており、集落域が存在していたと考えられる。また、平成26年度調査では、発掘区西部の微高地と東部の低地の境に溝状遺構が設置される他、集落域内でも溝状遺構を検出しており、集落域の排水溝や区画溝と考えられる。平成29年度調査で確認した集落域の南西部を区画したと考えられる溝状遺構(H29\_SD48)は、位置的に今回検出したSD3と接続する可能性がある。

**古代** 平成29年度調査では、8世紀前半以降に建てられたと考えられる掘立柱建物1棟を確認した。この掘立柱建物は方形の柱掘方を持ち、掘方の長軸長が0.63m～0.86mと規模が大きい。今回の発掘調査においても、同様に1辺0.76m～1.08mの方形の柱掘方をもつ掘立柱建物（SB1）を確認した。時期については2棟ともに8世紀代と考えられる。平成24年度調査では、10世紀前半と考えられる竪穴建物を確認した。長軸方位が南北軸とほぼ一致していることから、この頃までに大野郡の条里制に基づく地割が現在に近い形で成立したと考えられる。また同時期の遺構として、平成26年度調査で南北方向に長軸をもつ溝状遺構群を検出した。この遺構群は、復元条里における五里と六里の里境と考えられる。

**中世・近世** 平成24年度調査では、中世前期と考えられる竪穴建物を確認した。また、平成26年度調査では、条里地割に規制された中世以降の水田跡や坪境と考えられる溝状遺構を確認した。さらに、平成29年度調査では、平安時代以降の遺構として復元条里における十一条と十二条の条境溝や耕作に伴う土坑列を確認した。

#### 注

- 1) 各遺跡の記述については、以下の文献を参考にした。

大野町教育委員会2006『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』

大野町教育委員会2009『大野町遺跡詳細分布調査報告書 資料（考古）編』

大野町教育委員会2010『大野町史 増補編』

大野町教育委員会2011『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』

大野町1985『大野町史 通史編』

岐阜県2003『岐阜県史 考古資料』

岐阜県教育委員会2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第1集（西濃地区・本巢郡）』

- 2) 図7及び表2は岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県 遺跡地図』を基に、新たな成果を踏まえて作成したが、時代については発掘調査報告書の記載も参考にした。

- 3) 大野町教育委員会2013「大野町史跡条里跡（六里遺跡）の発掘調査」『平成25年度岐阜県発掘調査報告会資料』、岐阜県文化財保護センター

- 4) 過去の調査の記述については、3)と次の文献を参考にした。

岐阜県文化財保護センター2018『六里遺跡・稻荷遺跡』

岐阜県文化財保護センター2019『六里遺跡Ⅱ』



図7 六里遺跡周辺の遺跡（令和2年発行国土院1：25,000地形図「池野」「北方」を元に作成）

表2 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	六里遺跡	縄文～近世	集落跡他	37	南山古墳	古墳	古墳
2	物干山遺跡	縄文	散布地	38	中ノ洞古墳群	古墳	古墳
3	カイト遺跡	縄文・古墳・中世・近世	散布地・集落跡・社寺跡	39	押ヶ谷古墳	古墳	古墳
4	姥田遺跡	縄文・古墳	集落跡	40	南押ヶ谷古墳群	古墳	古墳
5	南山遺跡	弥生・古墳	集落跡	41	祖浜古墳群	古墳	古墳
6	法政寺・御屋敷遺跡	弥生	集落跡	42	脛ヶ洞古墳	古墳	古墳
7	笹山遺跡	弥生	散布地	43	三ヶ原古墳群	古墳	古墳
8	松山遺跡	弥生・中世	散布地	44	物干山古墳群	古墳	古墳
9	加納一ノ坪遺跡	弥生～中世	散布地	45	堂ヶ洞古墳群	古墳	古墳
10	板井街道遺跡	弥生・古墳・平安	散布地	46	宮東古墳群	古墳	古墳
11	大藪遺跡	古墳	集落跡	47	岩子古墳群	古墳	古墳
12	寺内遺跡	古墳	集落跡・社寺跡	48	西ノ洞古墳群	古墳	古墳
13	座倉遺跡	古墳～平安	集落跡	49	竹洞古墳	古墳	古墳
14	塚町遺跡	古墳～平安	集落跡	50	大平山古墳群	古墳	古墳
15	宇津宮遺跡	古墳・中世	集落跡	51	室塚古墳	古墳	古墳
16	高見遺跡	奈良～平安	集落跡	52	野古墳群	古墳	古墳
17	公郷一ノ坪遺跡	奈良～中世	集落跡	53	一ツ塚古墳	古墳	古墳
18	稲荷遺跡	奈良～中世	集落跡・生産遺跡	54	十二塚古墳群	古墳	古墳
19	東ノ里遺跡	奈良～平安	散布地	55	志名古墳群	古墳	古墳
20	加納神明神社遺跡	奈良～平安	散布地	56	白山神社古墳	古墳	古墳
21	天神遺跡	奈良～中世	散布地	57	領家実相院跡	奈良～中世	社寺跡
22	小衣斐村ノ内遺跡	奈良～中世	散布地	58	大隆寺跡	奈良～中世	社寺跡
23	黒野八幡神社遺跡	奈良～中世	散布地	59	三千仏遺跡	平安～中世	社寺跡
24	柚木洞・布賀利神社遺跡	奈良・中世	散布地・社寺跡	60	金剛寺遺跡	平安～中世	社寺跡
25	石原遺跡	平安～中世	散布地	61	専大寺跡	中世	社寺跡
26	宮通遺跡	平安～中世	散布地	62	相羽城跡	中世	城館跡
27	大衣斐八幡神社遺跡	平安～中世	散布地	63	中之元城跡	中世	城館跡
28	社宮司遺跡	平安～中世	散布地	64	上ノ城跡	中世	城館跡
29	郡家遺跡	中世	散布地	65	下ノ城跡	中世	城館跡
30	カイト古墳群	古墳	古墳	66	日根野氏の大衣斐陣屋跡	中世	城館跡
31	カツラ山古墳	古墳	古墳	67	西尾氏の中之元陣屋跡	近世	城館跡
32	駒越古墳群	古墳	古墳	68	織田河内守邸跡	近世	城館跡
33	上磯古墳群	古墳	古墳	69	徳永氏の五之里陣屋跡	近世	城館跡
34	笹山古墳	古墳	古墳	70	西尾氏の五之里陣屋跡	近世	城館跡
35	亀山古墳	古墳	古墳	71	野村藩煙硝蔵跡	近世	城館跡
36	北山古墳	古墳	古墳	72	野村藩邸跡	近代	城館跡

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

基本層序は、令和2年度の試掘・確認調査の結果と本発掘調査の成果をもとに、基本層序を下記のとおり設定した。なお、平成29・30年度調査の基本層序<sup>1)</sup>との対応関係については表3に示す。

**I層** 圃場整備以降の土層を表土（I層）として一括した。このうち発掘区に隣接する駐車場造成に伴う客土をI a層（図8：1～6層）、現代耕作土をI b層（図8：8層）、その敷土をI c層（図8：9層）として細分した。なお、7層はI b層に伴う畦畔である。

**II層** 旧耕作土など遺物を含む堆積を遺物包含層（II層）とした。このうち圃場整備以前の水田耕作土をII a層（図8：10・11層）、その敷土をII b層（図8：12層）として細分した。II a層・II b層については発掘区全域に認められた。また、その下層に堆積する旧表土と推定される堆積をII c層（図8：13層）とした<sup>2)</sup>。平成29・30年度調査では2面調査を実施し、その際II c層上面を第1調査面の遺構検出面とした。今回の調査ではII c層は発掘区南部では確認できず、検出面とすることは困難と判断したため、II c層を除去して調査を行った。なお、発掘区北壁では、SD1はII c層上面から掘り込まれていること確認した（図8：SD1埋土）。

**III層** 旧地形を形成し、遺物を含まないことからこの堆積を基盤層（III層）とした。発掘区全域で確認した（図8：14層）。平成29・30年度調査におけるV b層と同一の堆積と考えられるが、「V b層の上面で、平成26年度調査で確認されていない土層」<sup>3)</sup>は認められなかった。今回の調査では、III層上面を検出面とした。

表3 平成29・30年度調査との対応関係

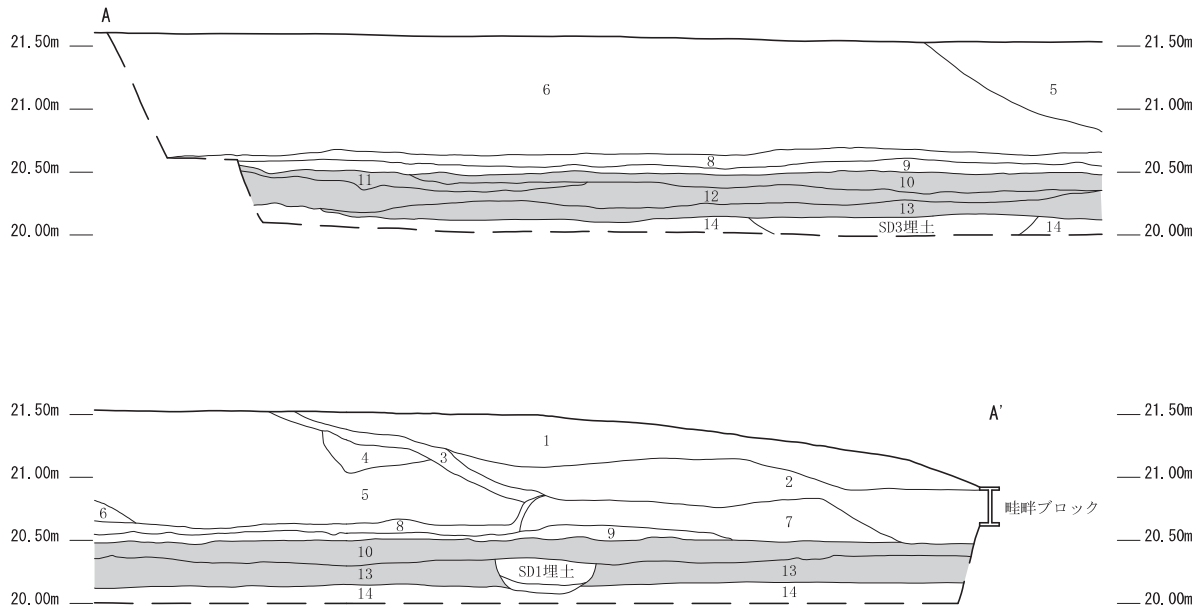
令和3年度調査	I a層	I b層	I c層	II a層	II b層	II c層	III層
平成29年度・30年度調査	I a層	I b層	I c層	II a層	確認していない	II b層	V b層

注

1) 岐阜県文化財保護センター2019『六里遺跡II』

2) 岐阜県文化財保護センター2018『六里遺跡・稲荷遺跡』

3) 1) 16頁



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまる 粘性ややあり 径1.0cm~2.0cmの亜角礫を1%含む I a層
- 2 10YR7/6 明黄褐色砂礫 しまりなし 粘性なし 径1.0cm~5.0cmの亜角礫を20%含む I a層
- 3 10YR3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1.0cm~5.0cmの亜角礫を5%含む I a層
- 4 10YR3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり I a層
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 しまりなし 粘性なし 径1.0cm~5.0cmの亜角礫を10%含む I a層
- 6 10YR7/6 明黄褐色砂礫 しまりなし 粘性なし 径1.0cm~10.0cmの亜角礫を30%含む I a層
- 7 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりなし 粘性なし 径1.0cm~5.0cmの亜角礫を1%含む
- 8 2.5Y5/1 黄灰色土 しまりなし 粘性ややあり 径1.0cm~2.0cmの亜円礫を1%含む I b層
- 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径1.0cm~2.0cmの亜円礫を1%含む I c層
- 10 2.5Y5/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり 径1.0cm~5.0cmの亜円礫を1%含む II a層
- 11 10YR4/1 褐灰色粘質土 しまる 粘性あり 径1.0cm~5.0cmの亜円礫を5%含む II a層
- 12 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 しまる 粘性あり 径1.0cm~5.0cmの亜円礫を5%含む II b層
- 13 10YR3/1 黒褐色粘質土 しまる 粘性あり II c層
- 14 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 しまる 粘性なし III層

遺物包含層 (II層)

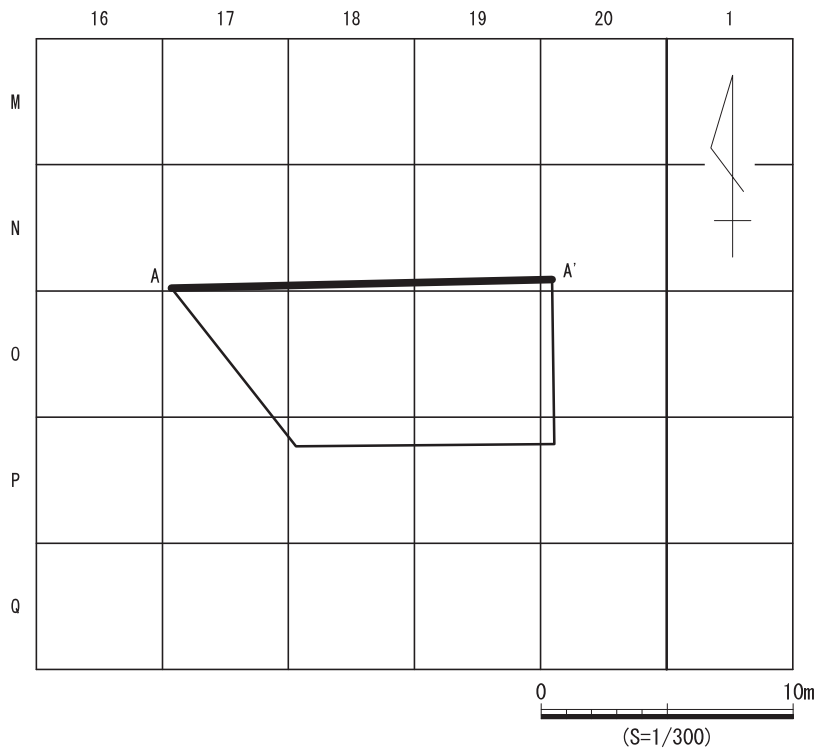
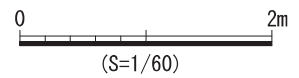


図8 発掘区北壁の土層断面

## 第2節 遺構・遺物の概要

### 1 遺構の概要

#### (1) 概要

今回の調査では、古墳時代後期から古代、中世以降の遺構を検出した。

遺構数は表4のとおりである。遺構の時期は、出土遺物や遺構の重複関係、検出状況や埋土から判断したが、時期不明とした遺構が多い。本報告書では、これらの遺構のうち、遺跡の性格を検討する上で重要なものや、時代を特定できる遺物が出土したものについて詳細に説明し、それ以外については一覧表で示した。

表4 遺構検出数

種別	遺構数
SB	1
SD	3
SK	17
合計	21

#### (2) 遺構の分類

各遺構は、形状や規模などから以下のように分類した。

**掘立柱建物（SB）** 発掘区北東隅で検出した4基の柱穴状の遺構が、規則的に並び発掘区外に続くと考えられることから、これを掘立柱建物とした（SB1）。

**溝（SD）** 細長く掘り込まれた溝状の遺構。

**土坑（SK）** 上記以外で、人為的に掘り窪められた遺構を一括した。

#### (3) 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基本的情報は、種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は一部異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

**遺構番号** 種別と番号で表記した。原則として発掘区西側から略号と共に番号を付与した。

**地区割** 第1章第2節で示した大グリッド（H29・30年度調査のものを踏襲）、小グリッド（南北列は北より順にO・P、東西列は西より順に17～20）を記載した。

**検出面** 基本層序の層位名を使用し、遺構を検出した面について、略号で示した（「Ⅲ層上面」は「Ⅲ上」等）。

**規模** 遺構の全形が確認できなかった場合は、残存長を（ ）で示した。

**平面形状・底面形状・堆積状況・断面形状** 確認した遺構については、図9のとおり分類した。SD3の西側に点在する遺構の多くは、平面の形状が円形で単層の土坑である。また、今回確認した掘立柱建物の柱掘方は方形若しくは長方形であり、すべての柱穴で柱痕跡が確認できた（図12）。断面形状は、半円形や逆台形のものが多い。

**重複関係** 「新>旧」の関係を示す。「新」には、その遺構より重複が新しいもの、「旧」には、その遺構より重複が古いものを示した。

**出土遺物** 以下のとおり、記号化して表記した。

H：土師器、P：須恵器、Y：山茶碗、T：山茶碗以外の中近世陶磁器、D：土製品、I：金属製品

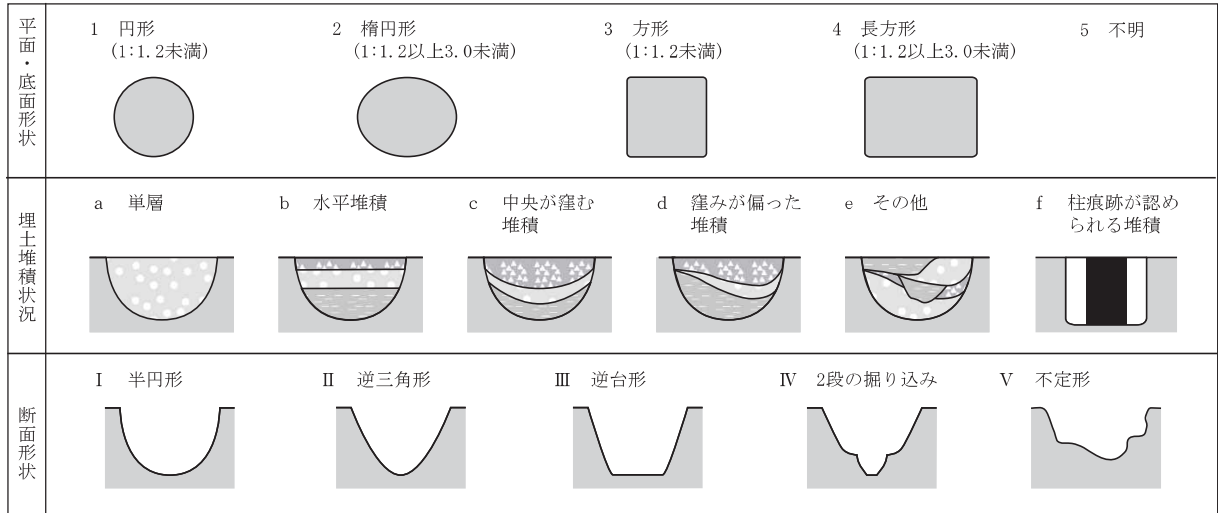


図9 遺構分類模式図

## 2 遺物の概要

### (1) 概要

今回の調査では、土師器、須恵器、中近世陶磁器などが出土した(表5)。ただし、遺構から出土した遺物はわずかで、ほとんどが表土・遺物包含層からの出土である。本報告書では、これらの遺物のうち遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。なお、遺物の年代観や器種分類等については、既存の研究<sup>1)</sup>を参考とした。また、須恵器は渡邊博人氏に分類や時期について御指導をいただいたが、本書における記載内容の責任は編集者にある。

表5 出土遺物一覧表

大別	種別	接合前破片数(点)	接合後破片数(点)	接合後破片数割合(%)	重量(g)	重量割合(%)
土器類	土師器	1,150	995	87.82	6,838.8	79.1
	須恵器	175	133	11.74	1,703.2	19.7
	中近世陶磁器	5	5	0.44	105.3	1.2
	土器類合計	1,330	1,133	100.00	8,647.3	100.0
土製品		1	1	—	39.4	—
鍛冶関連遺物		1	1	—	3.4	—
合計		1,332	1,135	—	8,690.1	—

物や、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。なお、遺物の年代観や器種分類等については、既存の研究<sup>1)</sup>を参考とした。また、須恵器は渡邊博人氏に分類や時期について御指導をいただいたが、本書における記載内容の責任は編集者にある。

### (2) 出土遺物の分類

**土師器** 器種は甕・高坏・皿・製塩土器などがあるが、今回の調査では、甕が主に出土した(表6)。時期はほとんどが古墳時代後期から古代に属すると考えられる。なお、出土数の多い甕は、既存の研究<sup>2)</sup>をもとに下記のとおり分類を行った。

**甕A** 端部を上に取り上げるような形状の口縁部をもつもの。体部の内外面と口縁部内面にハケ調整を施す。

**甕B** 口縁部がくの字状に開くもの。体部外面は縦に粗いハケ目を施す。器壁が薄く、底面は平底となる。

表6 土師器分類別破片数・重量

分類	接合後破片数	重量
甕	959	6,661.7
坏・皿・高坏	17	135.1
製塩土器	11	23.9
器種不明	8	18.1
合計	995	6,838.8



**須恵器** 今回の調査では、7世紀後半から8世紀初頭にかけての須恵器が主に出土した。産地は美濃須衛窯産が多いが、猿投窯産や畿内系<sup>3)</sup>もある。器種は坏類、壺類や瓶類が出土した(表7)。比較的地出土数の多い坏類は下記のとおり分類を行った。

**坏蓋A類** 返りを持たないもの。

**坏蓋B類** 口縁部内面に返りが認められるもの。

**坏蓋C類** 口縁端部を屈曲させるもの。

**坏身A類** 受け部があるもの。

**坏身B類** 受け部がないもので、高台がないもの。

**坏身C類** 受け部がないもので、高台があるもの。

表7 須恵器分類別破片数・重量

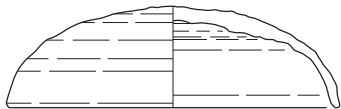
分類	接合後破片数	重量	分類	接合後破片数	重量
坏蓋A	5	70.6	坏(分類不可)	7	66.7
坏蓋B	2	20.3	碗	3	20.6
坏蓋C	16	285.1	高坏	4	128.6
坏身A	8	193.7	平瓶・提瓶	12	173.0
坏身B	5	49.2	甕	28	321.6
坏身C	12	174.4	その他	8	69.7
坏身B・C	23	129.7	合計	133	1,703.2

**中近世陶磁器** I・II層から碗、瓶、甕など5点出土した。

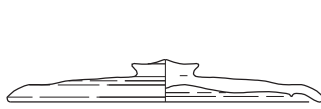
**土製品** 土錘1点出土した。

**鍛冶関連遺物** 鉄滓1点出土した。

坏蓋A



坏蓋B



坏蓋C

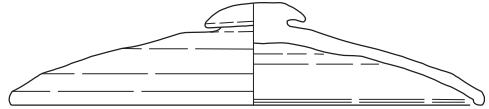
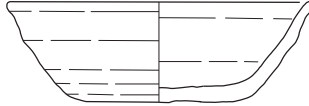


図10 須恵器坏蓋の分類 (S=1/3)

坏身A



坏身B



坏身C

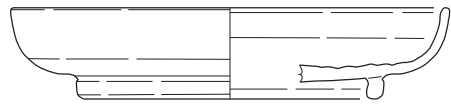


図11 須恵器坏身の分類 (S=1/3)

### (3) 遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、種別ごとに作成し、遺物番号順に記載した。種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

**出土位置** 複数のグリッドや遺構から出土した遺物が接合した場合は、すべての出土位置を示した。遺物の出土層位は第1章第2節で明記したとおりである。なお、複数の土層から出土した場合は、すべての層位を示した。

**分量** ( ) で示した大きさは、土器の場合は復元長、その他製品については残存値を示した。

**口縁部残存率** 土器の残存状態を示すため、口縁部残存率<sup>4)</sup> を記載した。

**器面調整** 磨滅等により不明な場合は、「不明」と記載した。

**胎土・色調** 胎土中の含有物は肉眼観察で判断した。色調は「新版標準土色帳」<sup>5)</sup> に基づき肉眼観察

で判断し、見本に近い色調を記載した。

注

- 1) 土器類の器種分類や年代観については、下記の文献を参考にした。

愛知県史編さん委員会2015『愛知県史 別冊 古代 猿投系』

内堀信雄・井川祥子1996「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕そのデザイン」』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

各務原市教育委員会1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』

城ヶ谷和広1996「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕そのデザイン」』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

田辺昭三1966『陶邑古窯址群 I』、平安学園考古学クラブ

森泰通2015「古代東海地方における堅塩づくりの製塩土器」『塩の考古学Ⅱ』、山梨県考古学協会・帝京大学文化財研究所

渡邊博人1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相―蓋坏の型式設定とその編年試案―」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会

渡邊博人2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会2008愛知県大会研究発表資料』、日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会

- 2) 1) のうち内堀・井川1996、城ヶ谷1996

- 3) 1) のうち渡邊博人1996、愛知県史編さん委員会2015

- 4) 宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館

- 5) 小山正忠、竹原秀雄2015『新版標準土色帖』、日本色研事業株式会社

### 第3節 遺構・遺物

#### 1 掘立柱建物

##### SB 1 (図12~14)

**検出状況** A019グリッドのⅢ層上面で検出した。同規模の柱穴(P1~P4)がL字形に配置されることから、発掘区外に広がる掘立柱建物と判断した。遺構埋土の色調が基盤土と明確に異なり、平面形はいずれも明瞭であった。検出当初は、各柱穴から東へ0.6mほどずれた位置で重複する同規模の遺構3基(SK15~SK17)を確認したため、建て替えが行われたと判断し、重なり合う遺構を段掘りして検出した。その結果、SK15~SK17では柱痕跡が確認できず、またSK16・SK17については深さ0.2m前後で掘削を中断していることが判明した。そのためSK15~SK17は建て替え前の柱穴ではなく、当初SK15~SK17の位置で設定された建物の位置が何らかの理由で変更された痕跡と判断した。

**規模・形状** 各柱穴の掘方の平面形は方形若しくは長方形で、規模は一辺0.76m~1.08m、深さ0.37m~0.48mである。南北方向に1間(1.36m)以上、東西方向に2間(3.79m、柱間1.86m~1.93m)以上の掘立柱建物で、長軸方位N-20°-Wである。

**柱穴** 全ての柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡の平面形は円形で、直径は0.18m~0.23mである。

**遺物出土状況** P1から土師器1点、P2から土師器6点、P3から土師器5点、P4から土師器2点が出土した。

**出土遺物** P1~P3から出土した土師器3点(1~3)を図示した。1~3は土師器の甕A類である。1はP1の柱掘方埋土から出土した口縁部で、口縁端部を上方に摘み上げ、内面は横ハケ調整後に横ナデ、外面は横ナデを施す。ハケ目はやや細かい。また、外面には凹線1条が巡る。2はP2の柱掘方埋土から出土した頸部に近い体部上半部で、内面は斜め方向のケズリ調整、外面は縦ハケを施す。ハケ目の密度が細かく、器壁がやや薄い。3はP3の柱掘方から出土した口縁部で、口縁端部を上方に短く摘み上げ、内外面は横ハケ後に横ナデ調整を施す。口縁端部外面には沈線1条が巡る。器壁は薄い。

**時期** 本遺構はSD3に隣接するため、SD3との同時併存は考えにくい。後述するとおり、SD3は6世紀末以降に掘削され7世紀中葉以降に埋没したと考えられること、Ⅱ層出土遺物の主体は7世紀後葉から8世紀初頭であること(本節4参照)などから、本遺構はSD3埋没後の8世紀初頭に造営された可能性がある(第4章参照)。

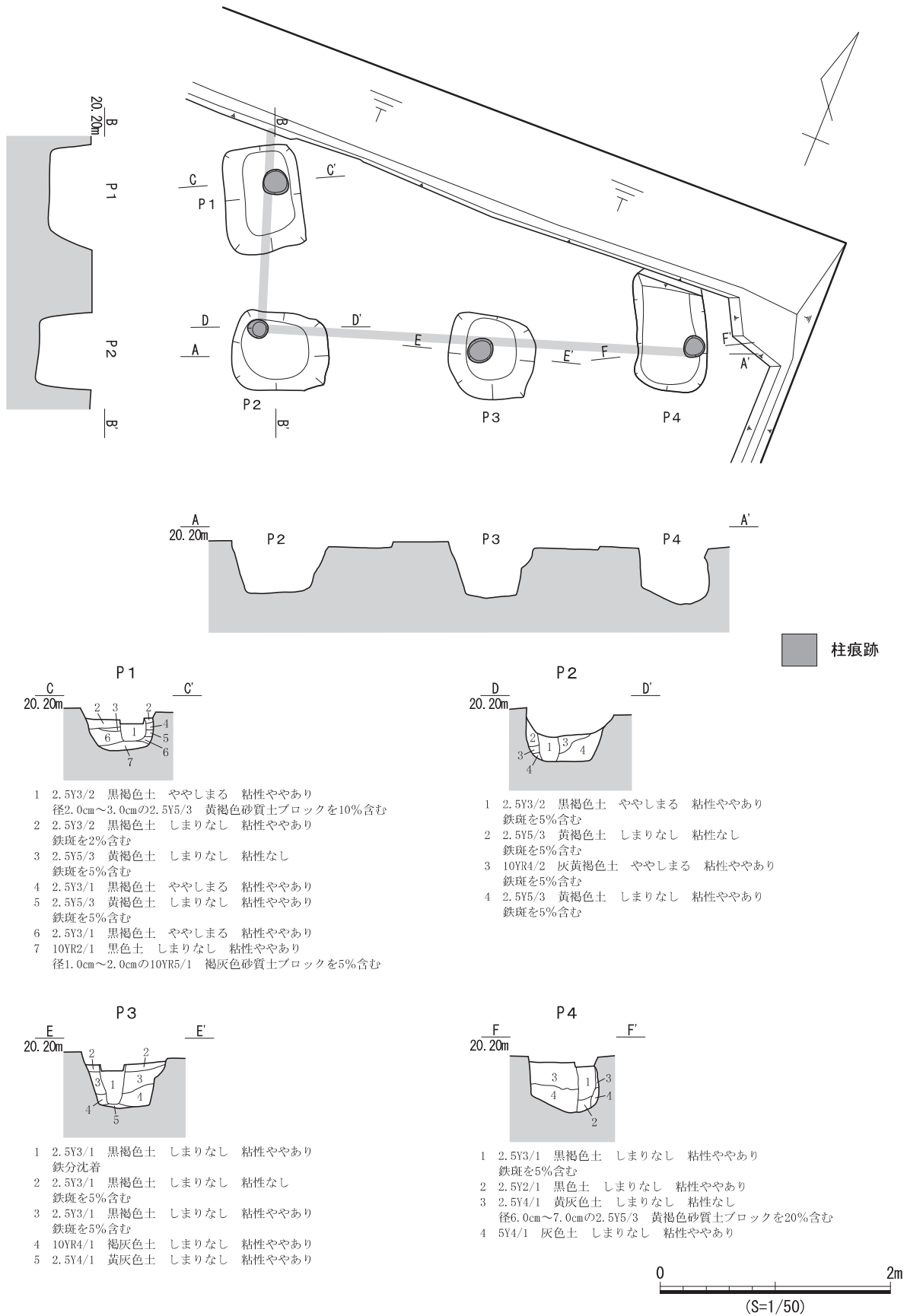
#### 2 溝状遺構

##### SD 1 (図15)

**検出状況** A0・AP19グリッドのⅡc層上面で検出した。本遺構の北部と南部は発掘区外に延びる。遺構埋土と基盤土の色調が明確に異なり、平面形は明瞭であった。

**規模・形状** 平面形は南に向かって幅が広がりながら直線的に延び、断面形は逆台形である。最大幅1.40m、深さ0.20mで、長軸方向はN-1°-Wである。底面の標高は北端で20.13m、南端で20.07mであることから大きな差は認められない。流水があった場合、北から南に向かって流れた可能性があるが、緩やかであったと考えられる。

**埋土** 堆積状況は、A-A'断面を2層、B-B'断面を4層に分層した。各断面は混入物に差が認



- P1**
- 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
径2.0cm~3.0cmの2.5Y5/3 黄褐色砂質土ブロックを10%含む
  - 2.5Y3/2 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり  
鉄斑を2%含む
  - 2.5Y5/3 黄褐色土 しまりなし 粘性なし  
鉄斑を5%含む
  - 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
  - 2.5Y5/3 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり  
鉄斑を5%含む
  - 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
  - 10YR2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり  
径1.0cm~2.0cmの10YR5/1 褐灰色砂質土ブロックを5%含む

- P2**
- 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
鉄斑を5%含む
  - 2.5Y5/3 黄褐色土 しまりなし 粘性なし  
鉄斑を5%含む
  - 10YR4/2 灰黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
鉄斑を5%含む
  - 2.5Y5/3 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり  
鉄斑を5%含む

- P3**
- 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり  
鉄分沈着
  - 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性なし  
鉄斑を5%含む
  - 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり  
鉄斑を5%含む
  - 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性ややあり
  - 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりなし 粘性ややあり

- P4**
- 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりなし 粘性ややあり  
鉄斑を5%含む
  - 2.5Y2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり
  - 2.5Y4/1 黄灰色土 しまりなし 粘性なし  
径6.0cm~7.0cmの2.5Y5/3 黄褐色砂質土ブロックを20%含む
  - 5Y4/1 灰色土 しまりなし 粘性ややあり

図12 SB1遺構図

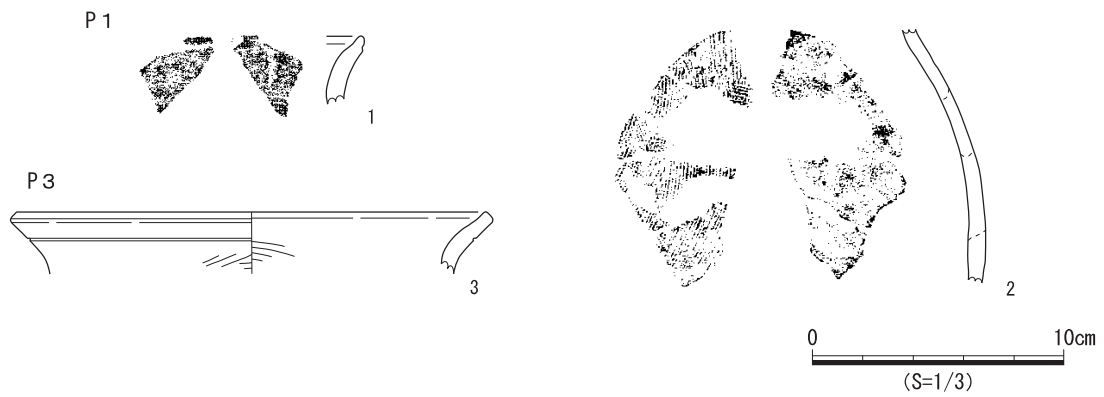


図13 SB 1 出土遺物実測図

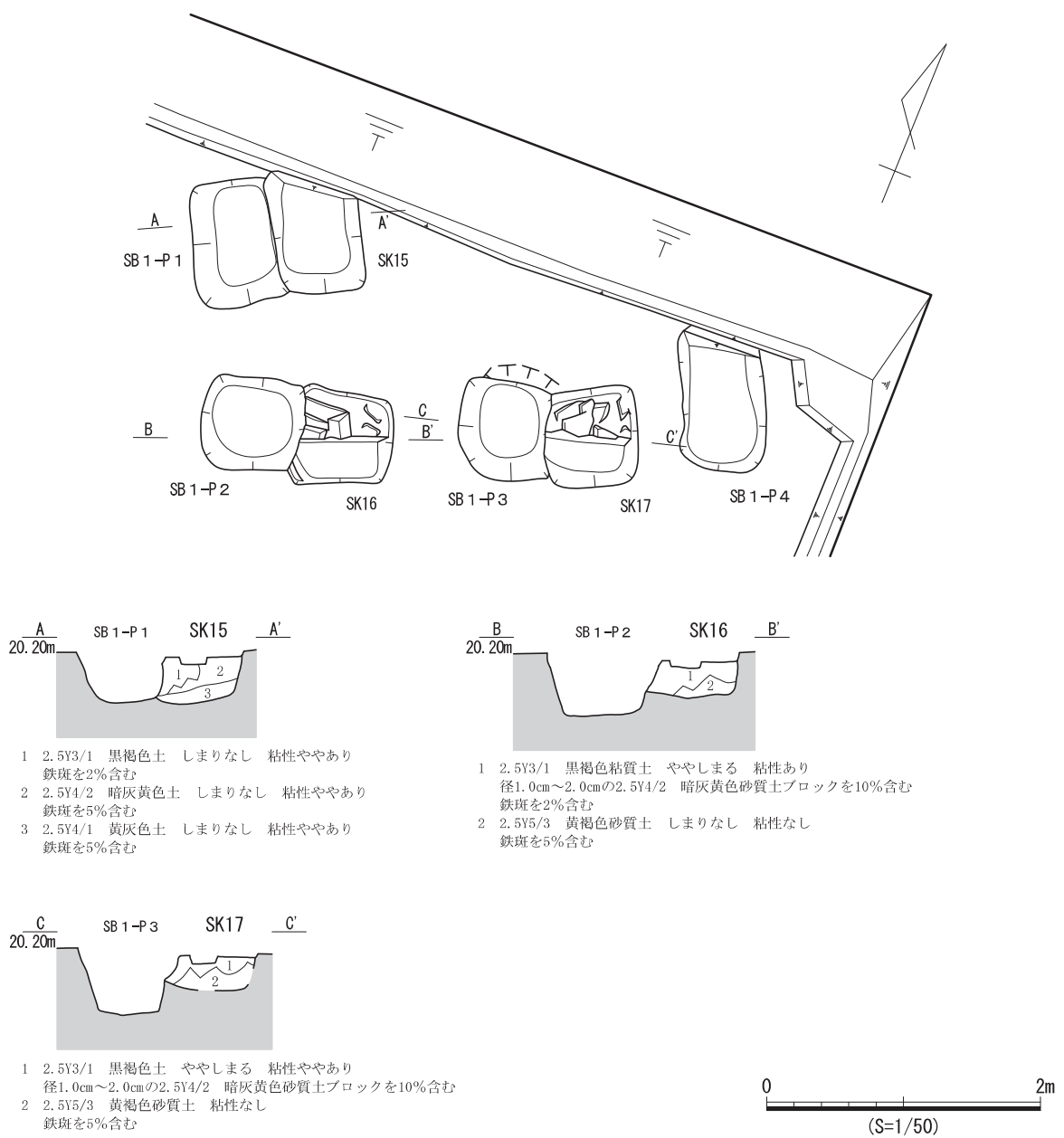


図14 SK15 ~ SK17 遺構図

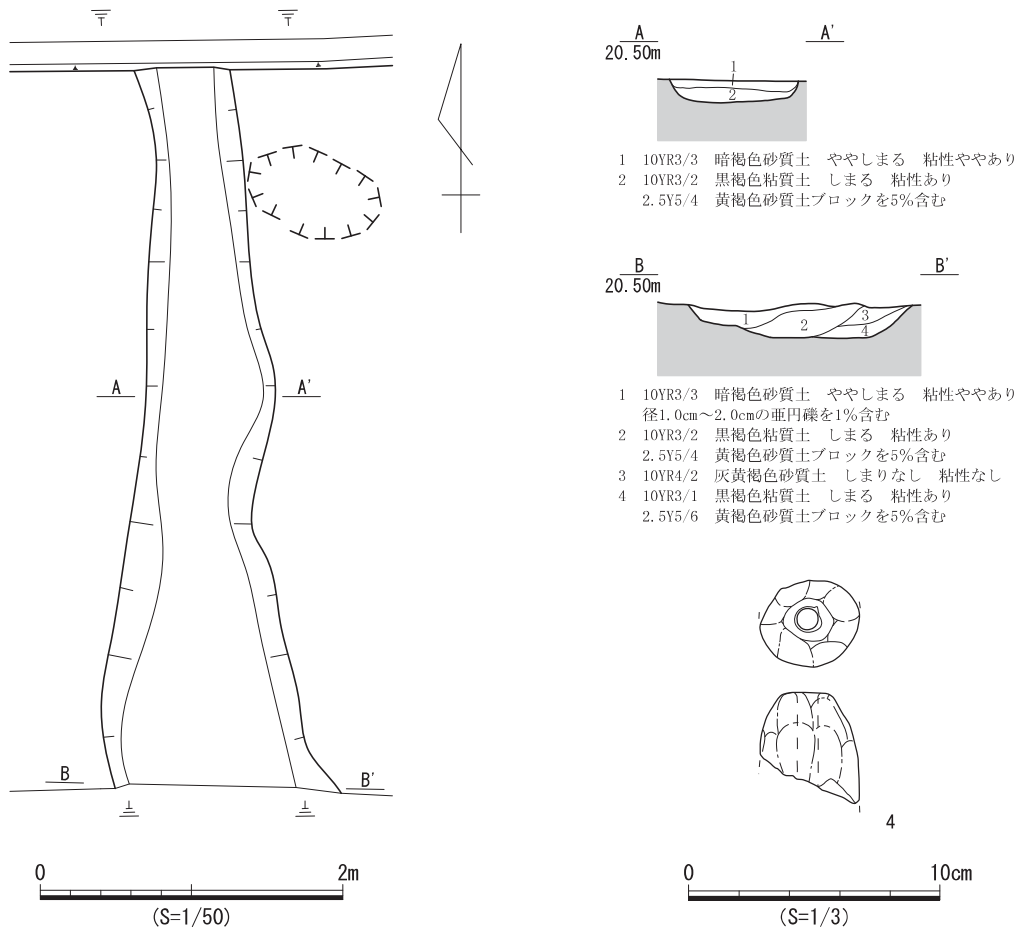


図 15 SD 1 遺構図・出土遺物実測図

められ、1層は礫をわずかに含み、2層・4層はブロック土を含む。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器7点、土製品1点が出土した。そのうち6点が埋土上位から出土しており、底面から遺物は出土していない。

**遺物** 出土した土製品1点(4)を図示した。4は管状土錘で、最大径4cm、推定の長さ8cm前後の大型品である。長軸方向に径0.8cmの穿孔があり、外面は指オサエの痕跡が残る。

**時期** 時期を特定できる遺物は出土していないが、IIc層上面で検出したことから中世以降のものと思われる。

**SD 3 (図16)**

**検出状況** A018~AP19グリッドのIII層上面で検出した。本遺構の北西部と南東部は発掘区外に延びる。遺構埋土と基盤土の色調が明確に異なり、平面形は明瞭であった。また、H29\_SD48の延長線上に位置し、溝の幅や深さがH29\_SD48と同規模であったため同一遺構と判断した。

**規模・形状** 平面形は直線的に延び、断面形は逆台形である。最大幅1.80m、深さ0.50mで、長軸方向はN-42°-Wである。底面の標高はH29\_SD48の南端が19.51m、本遺構の北端が19.61mであることから大きな差は認められない。流水があった場合、北から南に向かって流れた可能性はあるが、緩やかであったと考えられる。

**埋土** 4層に分層した。堆積状況は、A-A'断面は概ね水平でやや西側に窪む堆積であり、B-B'

断面は中央に窪む堆積である。1層ではブロック土を含んでいるため、人為的堆積の可能性が高い。

**遺物出土状況** 埋土中から須恵器2点、土師器21点が出土した。そのうち22点が埋土上位から出土しており、下位から出土した遺物は土師器(7)1点のみである。H29\_SD48では多量の須恵器や土師器が出土しており、「下層や掘方底面からは完形に近い土器も出土」<sup>1)</sup>している。今回の調査では、完形に近い土器は1点も確認できず、遺物数も少なく、H29\_SD48と比べて出土遺物の様相に差がみられる。

**出土遺物** 出土した須恵器2点(5・6)、土師器3点(7～9)を図示した。5は坏蓋A類で、内外面とも回転ナデ調整を施す。6は猿投窯産の高坏の脚部で、裾部に向かって強く外反して開き、端部を下方に屈折させ、接地部は丸く収める。内外面とも回転ナデ調整を施す。脚裾端部の形状から、7世紀前半代と考えられる。7・8は土師器の甕A類である。7は溝の底面で出土し、口縁端部を上方に鋭く摘み上げ、端部内面に受口状の段を形成する。内面はやや細かなハケ目の横ハケ調整、外面はナデ調整を施す。器壁は厚い。H29\_SD48の底部から出土した須恵器は美濃須衛窯編年Ⅲ-1期に属し、6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。このことから7も同時期の可能性がある。8は口縁端部を上方に短く摘み上げ、内外面は横ハケ調整後に横ナデを施す。体部内面は横方向にヘラケズリ、外面は縦ハケ調整を施す。ハケ目は細かく、器壁は薄い。9は製塩土器の口縁部である。口径約6cmの小型品で口縁部に向かって直線的に開き、端部は上方にやや尖らせる。内面はナデ調整、外面は指オサエで調整を施す。小型で器壁が2mmと薄いことから美濃式1類<sup>3)</sup>に分類され、7世紀後半のものと考えられる。

**時期** H29\_SD48と同一遺構と考えられることから、本遺構は6世紀末以降に開削され、「7世紀中葉以降に廃絶」<sup>2)</sup>したと考えられる。

### 3 土坑

#### SK1 (図17)

**検出状況** A017グリッドのⅢ層上面で検出した。遺構埋土と基盤土の色調が明確に異なり、平面形は明瞭であった。重複関係からSK2より古い。

**規模・形状** 長軸長0.62m、短軸長0.44m、深さ0.24mである。平面形は楕円形で、断面形は2段の掘り込みである。

**埋土** 2層に分層した。1層と2層の層界と傾斜の変換がほぼ一致することから、1層と2層はもとは別遺構であった可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土師器2点が出土した。

**遺物** 出土した土師器1点(10)を図示した。10は甕A類の体部で、内面は横ハケ調整、外面は縦ハケ調整を施す。ハケ目が細かく、器壁はやや厚い。

**時期** 時期を特定できる遺物は出土していないが、Ⅲ層上面で検出したことから古墳時代後期から古代のものと思われる。

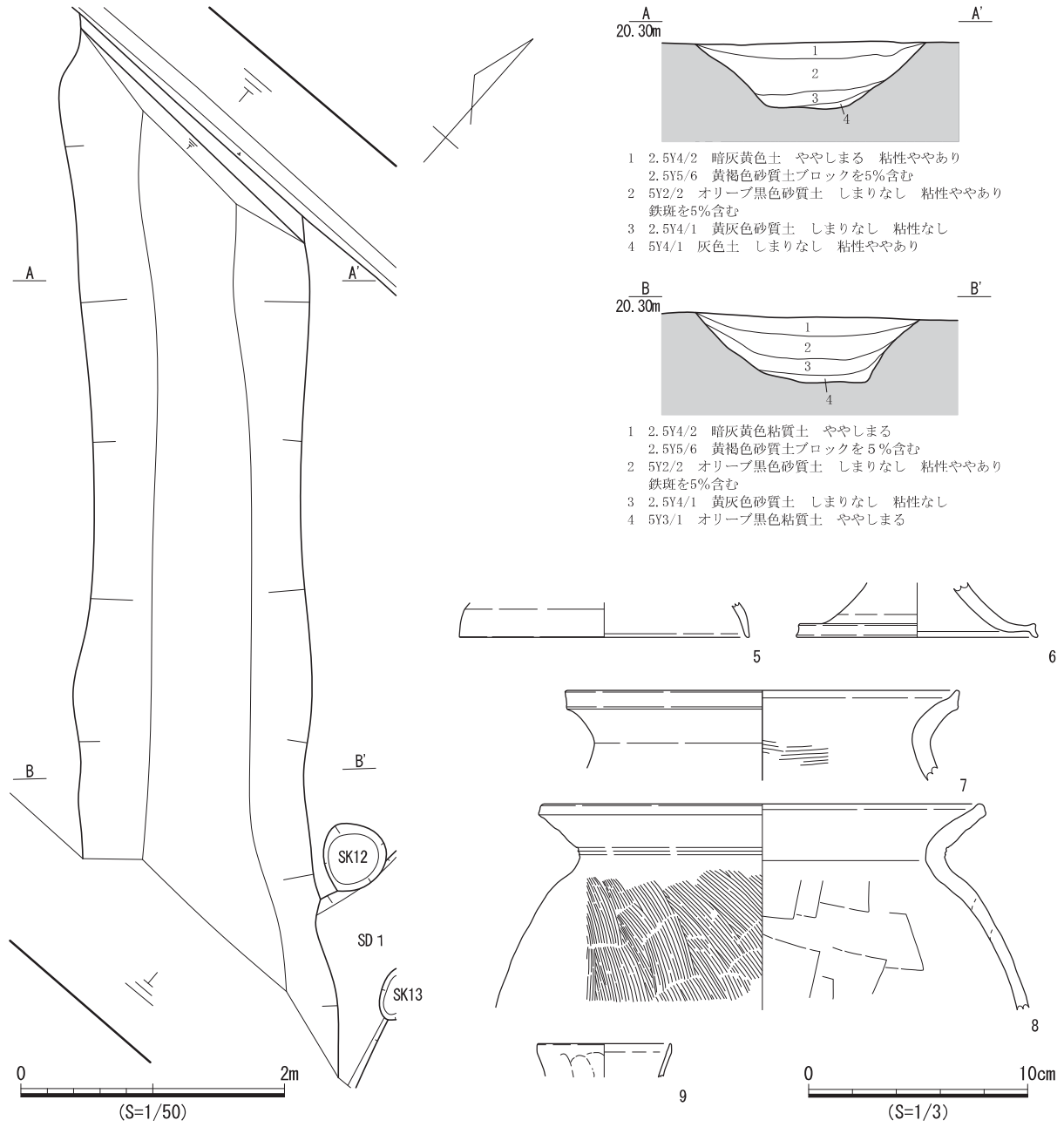


図16 SD3遺構図・出土遺物実測図

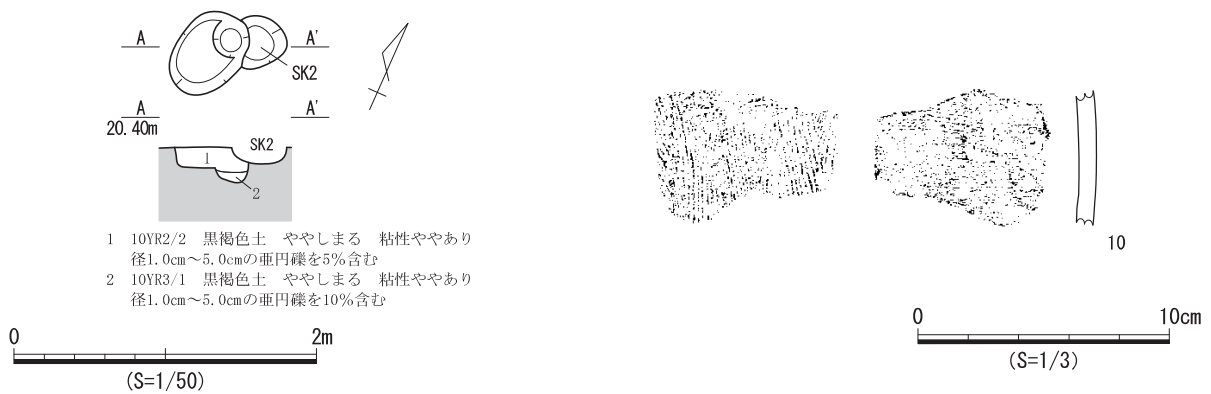


図17 SK1遺構図・出土遺物実測図



#### 4 遺物包含層出土遺物（図18～図21）

本項では、Ⅱ層から出土した遺物について報告する。須恵器35点（11～45）、土師器39点（46～84）を図示した。須恵器については、所属時期は6世紀後半代から8世紀後半代まで時期幅があるが、実測遺物で時期が推定できる31点のうち、23点（約74%）が7世紀後葉から8世紀初頭のものである。器種は坏類（高坏も含む）が31点（約84%）で最も多く、瓶類が3点、甕が3点である。貯蔵用土器が少なく、供膳用土器が圧倒的に多い。土師器については、器種は坏身・皿・高坏が6点、製塩土器が5点、甕が28点で、供膳用土器と製塩土器の出土がこれまでの六里遺跡出土遺物の様相と異なる。供膳用土器は、赤褐色や橙色の色調を呈し、緻密な胎土を使用し、内面に暗文を施した畿内系土師器<sup>4)</sup>で、比較的まとまった量が出土した。狭小な今回の発掘区において、実測遺物を含めて接合後破片数が17点に及び、畿内地域の土師器編年<sup>5)</sup>では飛鳥Ⅲ～平城Ⅱに限定されており、SB1との関連が想定できる。製塩土器は、棒状脚をもつ知多・渥美式製塩土器と、棒状脚をもたない美濃式製塩土器<sup>6)</sup>が認められ、実測した遺物を含めて接合後破片数で11点を数える。これまでの六里遺跡の発掘調査でも集落域から製塩土器が若干数出土しているが、今回の出土数はやや多いといえる。

11～45は須恵器である。11は美濃須衛窯編年Ⅲ-3期に属する坏蓋A類で、天井部と口縁部の境に稜をもたず、口縁端部は丸く収める。12～14は坏身A類である。12は畿内系（TK217窯式期）で、口縁部は強く内傾して端部を尖らせ、受部は端部を上方に巻き上げて丸く収める。13・14は美濃須衛窯編年Ⅲ-2期に属し、口縁部は短く内傾して短く立ち上げて端部を丸く収め、受部は13が水平方向に、14が斜め上方に拡張して形成する。15は美濃須衛窯編年Ⅲ-3期に属する坏蓋B類で、天井部から口縁部に向かってわずかに内湾し、口縁端部は丸く収め、口縁部内面に低い返しを伴う。摘み部は欠損し不明である。天井部内面に墨書が認められるが、欠損部が大きく判読はできない。16～21は美濃須衛窯編年Ⅲ-3期からⅣ-1期、22は美濃須衛窯編年Ⅳ-3期に属する坏蓋C類である。16～21は7世紀後葉から8世紀前葉にかけての坏蓋C類に特徴的な熱い器壁に、16・20に見られる扁平で大ぶりの摘み部を伴うもので、口径が15cm～17cmで、後述する一般的な坏蓋C類の大きさに対応するが、17は口径24cmの大型品である。口縁端部は、17～19・21が下方又はやや外方へ折り返して端部は丸く収め、20は内方へ折り返し、端部はやや鋭い。21は外面の中段に沈線が1条巡る。22は口縁部を強く内側に巻き込みながら折り返し、端部に平坦面を形成する。23～37は美濃須衛窯編年Ⅲ-3期からⅣ-1期、又は猿投窯I41～C2窯式期に属する坏身B類又はC類である。23・24は猿投窯I41窯式期に属し、底部が不明であるが9cm前後の口径であることから坏身B類と考えられる。23は底部から口縁部に向かって直線的に外傾し、24は口縁部付近でやや直立して口縁端部はやや尖らせる。25～28は猿投窯I41～C2窯式期に属し、口径が10cm前後の坏身B類又はC類で、底部から口縁部に向かって直線的に開き、口縁端部は丸く収める。26は体部外面に沈線が1条巡る。29～34は坏身C類で、口径14cm～17cmを測る。29は平坦な底部外面の外側寄りに高台を貼り付け、丸みをもって体部に接続する。体部は直線的に立ち上げ、口縁端部は外反させて丸く収める。体部内面の中段に沈線が1条巡る。30～34は体部下半から口縁部に向かって直線的に開き、口縁端部を丸く収める。30・31は美濃須衛窯編年Ⅲ-3期、32～34は美濃須衛窯編年Ⅲ-3期～Ⅳ-1期に属する。35は坏身B類の底部で、体部は緩やかに外傾して立ち上がる。36は猿投窯I41～C2窯式期、37は美濃須衛窯編年Ⅲ-3期からⅣ-1期の碗状を呈する坏身C類である。36は高台から内湾して立ち上がり、体部中ほどから角度を上方に変えて直線

的に口縁部に至る。口縁端部は外面に沈線を1条巡らせてやや外反させ玉縁状を呈する。37は底部から内湾して口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は強く外反して上面に広く平坦面を形成する。底部と体部の境界付近の外面に沈線が1条巡る。38は7世紀中葉から8世紀代の猿投窯産、39は美濃須衛窯編年Ⅲ-2期からⅢ-3期に属する高坏である。38は体部が外傾して立ち上がり、口縁部との境界の外面に稜をわずかに突出させる。口縁部は直線的に開き、端部は丸く収める。39は脚部の基部から円柱状に垂下したのち裾部に向かって緩やかに開く。脚柱部内部には絞り痕を残す。また、内部に長さ2cmの直線による線刻が縦方向に1箇所あり、透かし孔を意図したと考えられる。40~42は瓶類である。40・41は美濃須衛窯編年Ⅲ-1期に属し、42は6世紀後半代で産地は不明である。40は平瓶で、頸部から口縁部に向かって直線的に立ち上がり、端部付近でやや内湾して端部はやや尖らせる。口縁部外面中段に沈線が2条巡る。41は平瓶の体部の閉塞付近の破片である。42は提瓶で、体部の径が16cmほどで、肩部に径2cmほどの粘土紐による把手が接続する。43~45は美濃須衛窯編年Ⅲ-2期からⅣ-1期に属する甕である。43は頸部から口縁部に向かって外反して開き、口縁端部付近を上方に折り返す。44は頸部から内傾したのち口縁部を外反させ、端部を上方に摘み上げて外面に垂直面を形成する。45は頸部から直線的に開き、口縁端部を上方に摘み上げて外面に内傾面を形成する。

46~84は土師器である。46~51は畿内系土師器で、飛鳥Ⅲ期から平城Ⅱ期に属する。46~48は坏で、46は体部から口縁部に向かって緩やかに内湾し、口縁端部は上方にやや尖らせて内面に外傾面をもつ。内面に底部付近から体部下半に放射状の暗文を巡らせる。口縁部外面に細い沈線が1条巡る。47は体部から口縁部に向かって直線的に開き、口縁端部付近で外反させて端部は上方に摘み上げ、わずかに平坦な内傾面を形成する。内面に縦方向の不規則な暗文を施す。48は底部から緩やかに内湾させながら立ち上がり、内面の体部下半に放射状の暗文を巡らせる。49・50は皿である。49は口縁部を端部に向かって緩やかに内湾させ、端部を丸く収める。内面に放射状の暗文を巡らせる。50は底部に広く平坦面をもつ。51は高坏で、脚基部から裾部に向かって外反して開き、裾部内面はやや屈折して丸く収めた端部に至る。52~56は製塩土器で、52・53は美濃式製塩土器、54~56は知多・渥美式製塩土器の棒状脚である。52・53は口縁部に向かって直線的に開き、52は端部を上方にやや尖らせ、53は端部を丸く収める。54は脚基部の径は1.3cm、端部は折損する。被熱により外面は赤褐色を呈する。55・56は被熱により外面が荒れている。57~84は土師器甕である。57~76は口縁部から体部上半にかけて、77~82は体部、83・84は底部の破片を実測した。これらのうち、57~75、77~80、83・84を土師器甕A類、76・81・82を土師器甕B類に分類した。57は頸部から強く外反して短く立ち上がる口縁部で、体部最大径が口径を大きく上回る。口縁端部を上方に鋭く摘み上げ、口縁部外面に垂直面を形成し口縁部内面に段をなす。58・59は口縁端部の形状と内外面のハケ・ナデの調整が57と同様であるが、口縁部を長く外傾させ、頸部内面のケズリ調整は認められない。60は口縁部を長く外傾させて体部最大径と口径に大きな差はない。口縁端部を上方に摘み上げ、端部外面に丸みのある内傾面を形成する。61は口縁端部を上方に鋭く摘み上げ、端部外面の内傾面に凹線1条を巡らせ、端部内面に段を形成する。62は口縁端部を上方に鋭く摘み上げ、端部外面の内傾面に凹線が2条巡り、端部内面に段を形成する。63・64は口縁端部を上方に摘み上げ、端部外面に内傾面を形成するが凹線は見られず、端部内面の段も不明瞭である。外面の縦ハケ、内面の横ハケのハケ目間隔は57~62に比べてやや粗い。65~67は口縁端部を斜め上方に摘み上げ、端部外面の平坦面や端部内面の段は形成せず、端部外面に凹線

が1条巡る。65・67のハケ目間隔は63・64と同様にやや粗いが、66は細かい。68は口縁端部を上方に鋭く摘み上げ、端部外面の垂直面に凹線が2条巡り、端部内面に段を形成する。内外面のハケ目間隔はやや粗い。69・70は口縁部の器壁が体部に比べて厚く、69は口縁端部を上方に鈍く摘み上げ、端部外面の内傾面に凹線が2条巡り、端部内面にはわずかな段を形成する。71は口縁端部を上方に摘み上げ、端部外面に平坦な内傾面を形成する。72・73は口縁端部を上方にわずかに摘み上げ、端部外面の外傾面に凹線が1条巡り、端部内面には明瞭な段は認められない。74は口縁部が頸部から強く外反して短く開き、口縁端部を斜め上方に摘み上げ、端部外面の面は外傾する。75は口縁部を外反させて口縁端部外面に垂直面を形成する。顕著な摘み上げは認められない。76は土師器甕B類で、口縁部を強く外反させ、端部に向かって器壁を肥厚させて端部は丸く収める。ハケ目は土師器甕A類に比べて粗く深い。77～80、83・84は土師器甕A類の体部及び底部である。77は体部外面に縦ハケ、内面の上半に横方向のケズリ、下半に縦方向のケズリ調整を施す。78・79は体部中段から下半の破片で、内面に縦又は斜め方向のケズリ調整を、外面に縦又は斜め方向のハケ調整を施す。80は内面にやや粗いハケ目間隔の横ハケの後ナデ調整を、外面に細かいハケ目間隔の縦ハケ調整を施す。83・84は底部及び底部付近の破片で、丸底を呈する。83は器壁が底部ほど厚く、調整は内面にケズリ、外面に細かなハケ目間隔の縦ハケ調整を施す。84は内面にケズリ、外面に縦横にハケ調整を施す。81・82は土師器甕B類の体部で、81は器壁の厚さが安定せずやや薄い。ハケ目間隔は土師器甕A類に比べて極めて粗く深い。82は内面に斜め方向のハケ調整後、縦方向のケズリ調整、外面に縦ハケ調整を施す。81同様、ハケ目は粗く深い。

## 注

- 1) 岐阜県文化財保護センター2019『六里遺跡Ⅱ』119頁
- 2) 森泰通 2015「古代東海地方における堅塩づくりの製塩土器」『塩の考古学Ⅱ』、山梨県考古学協会・帝京大学文化財研究所
- 3) 1)に同じ
- 4) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡 考察編』  
林部均 1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』、第72巻1号
- 5) 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』、真陽社
- 6) 森泰通 1997「東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐって—」『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』、塩の会シンポジウム実行委員会

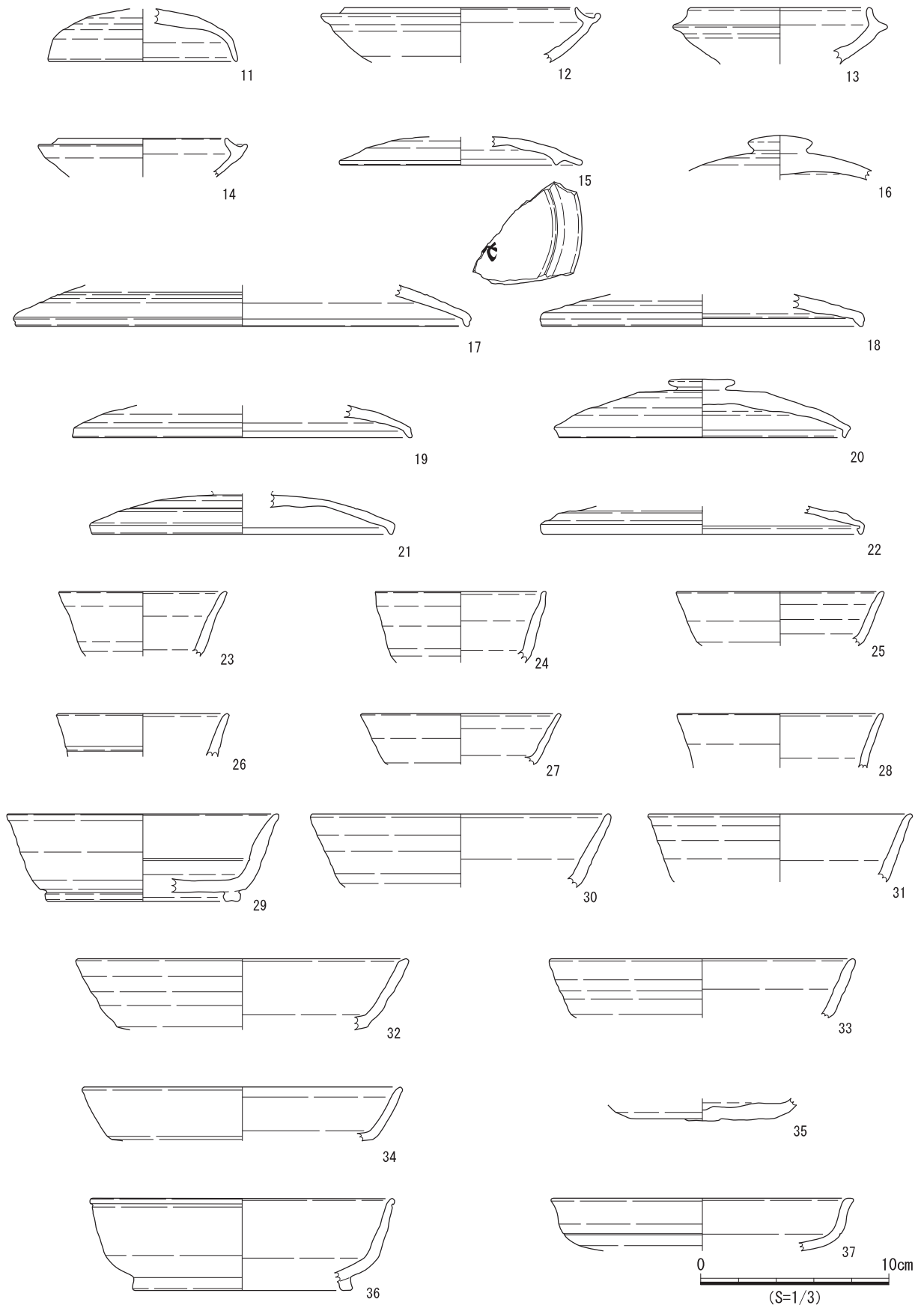


图18 遺物包含層出土遺物実測図(1)

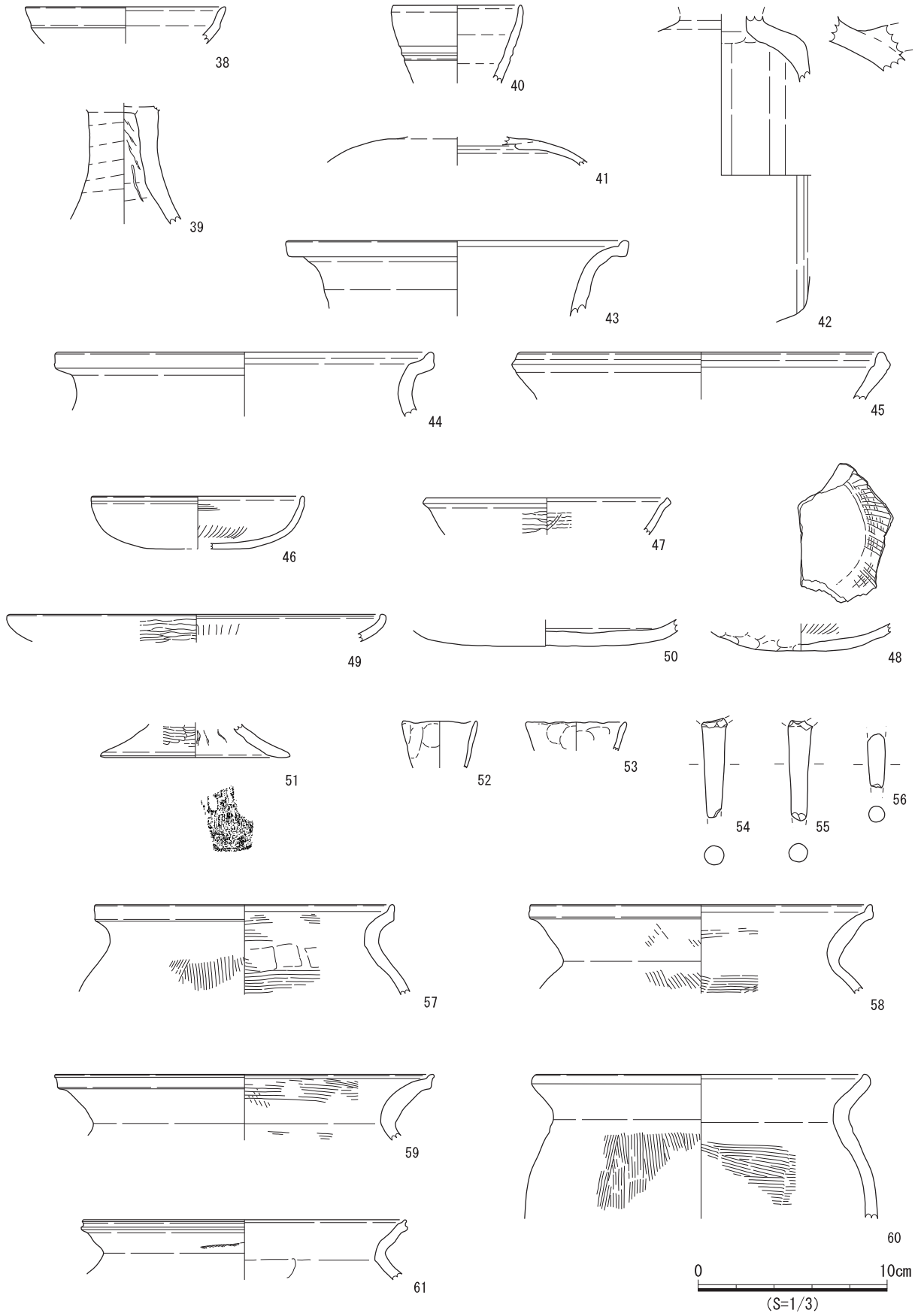


図19 遺物包含層出土遺物実測図(2)

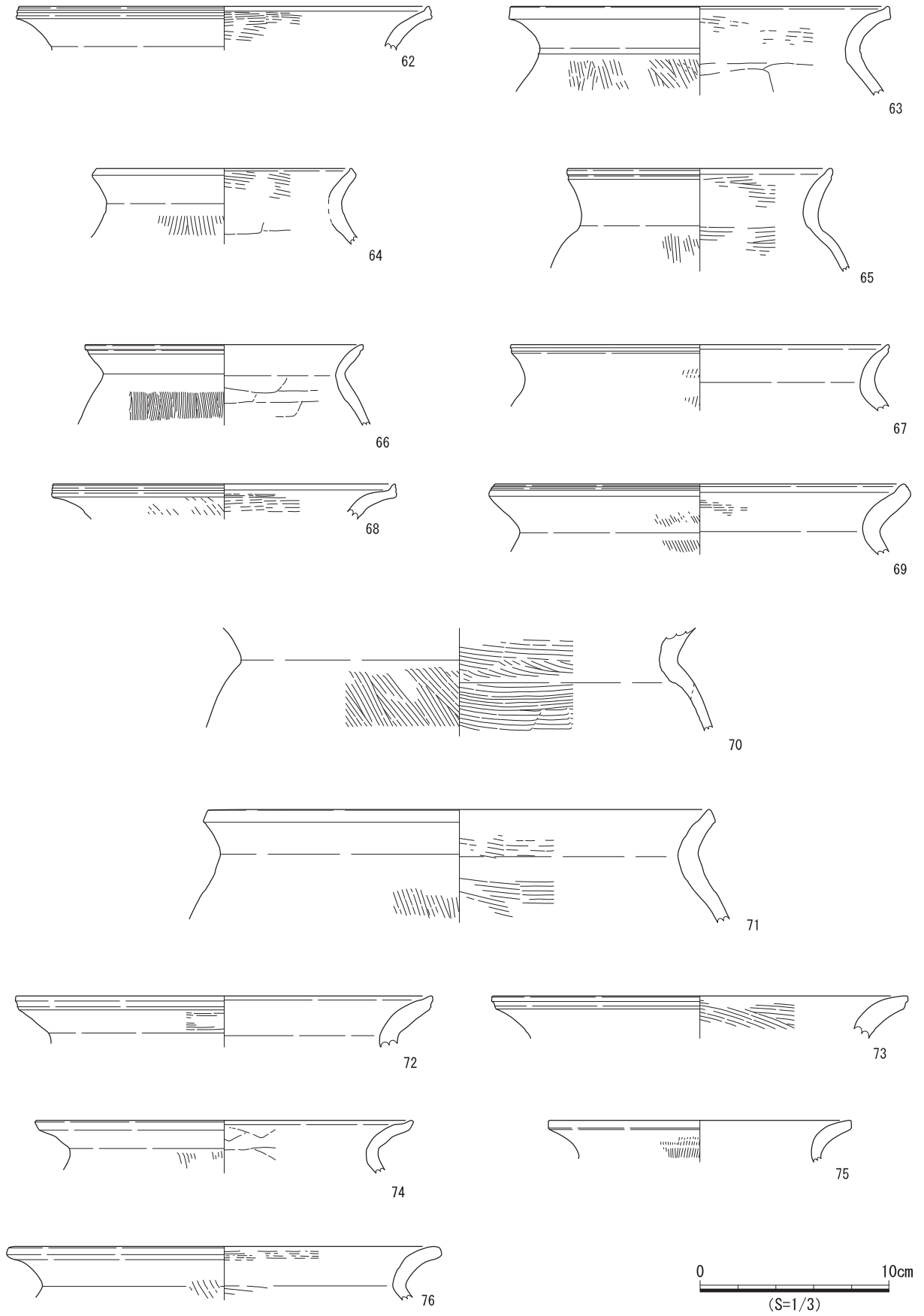


图20 遺物包含層出土遺物実測图(3)

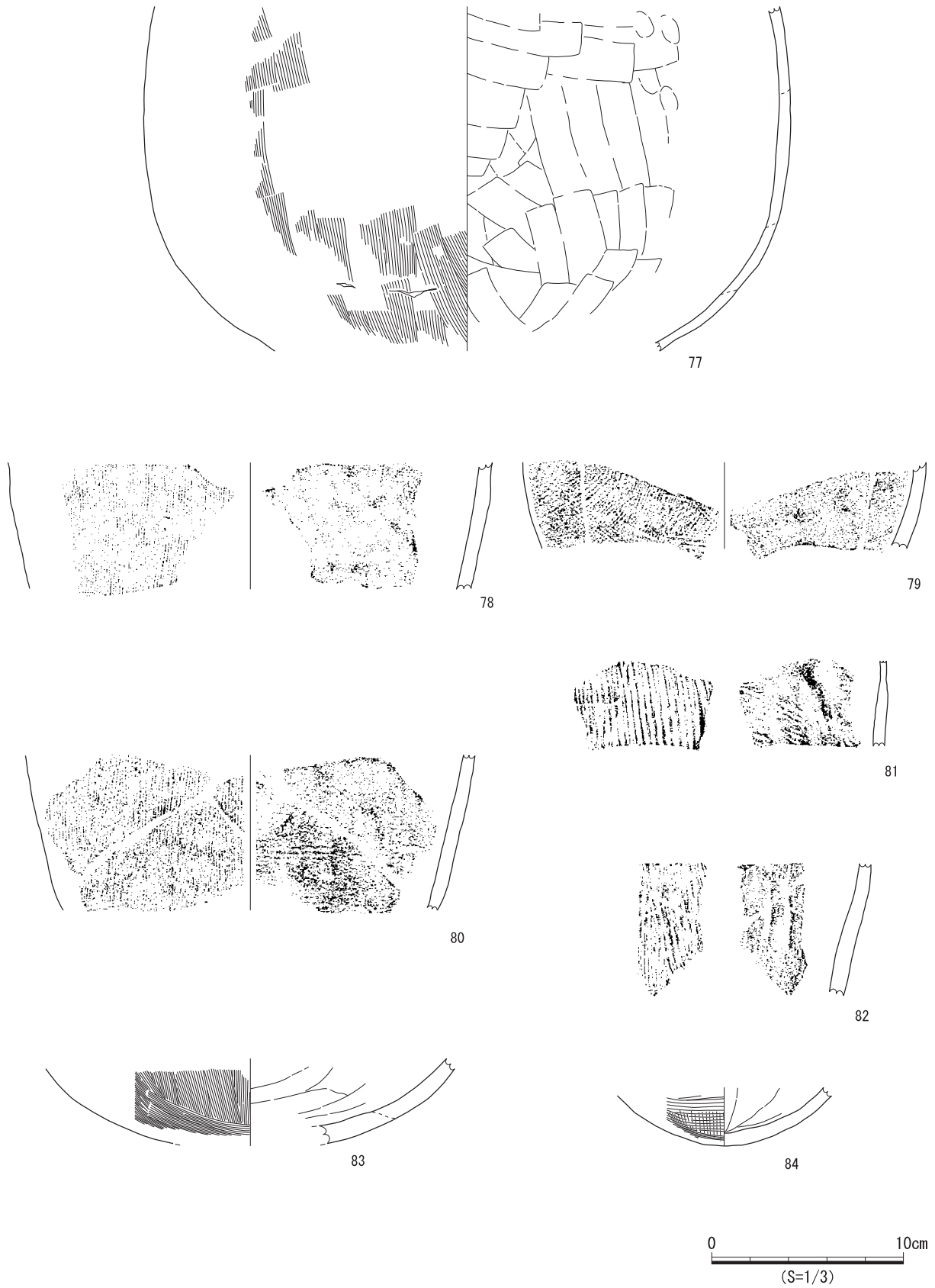


図 21 遺物包含層出土遺物実測図 (4)

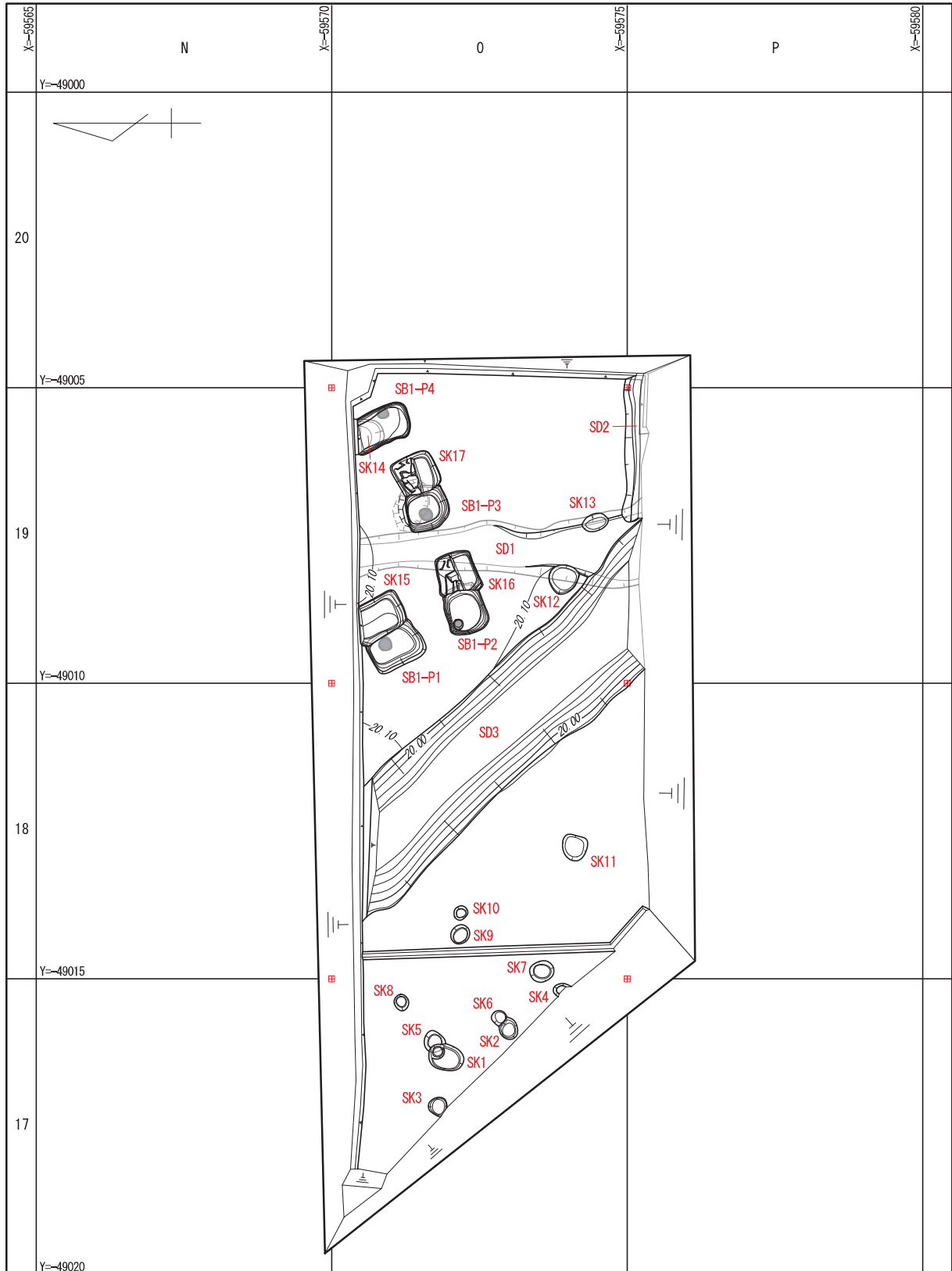


图 22 发掘区全域图



表8 掘立柱建物一覧表

遺構名	地区割り		検出面	柱間	規模(m)		長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西			桁行	梁行		新	旧	
SB1	A0	19	Ⅲ上	(1間×2間)	(1.36)	(3.79)	N 20° W	SK14	SK15 SK16 SK17	H11

表9 掘立柱建物付属遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形状	堆積状況	底面形状	断面形状	長軸長(m)		短軸長(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西						上端	下端	上端	下端			新	旧	
SB1-P1	A0	19	Ⅲ上	長方形	f	長方形	Ⅳ	0.92	0.72	0.66	0.42	0.37	N 30° W	-	SK15	H1
SB1-P2	A0	19	Ⅲ上	方形	f	方形	Ⅳ	0.83	0.69	0.59	0.50	0.45	N 70° E	-	SK16	H5
SB1-P3	A0	19	Ⅲ上	方形	f	方形	Ⅵ	0.76	0.53	0.74	0.44	0.47	N 60° E	-	SK17	H4
SB1-P4	A0	19	Ⅲ上	長方形	f	長方形	Ⅳ	(1.08)	(0.88)	0.60	0.48	0.48	N 25° W	SK14	-	H1

表10 溝状遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積状況	断面形状	長さ(m)		幅A(m)		幅B(m)		深さA(m)	深さB(m)	主軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧	
SD1	A0 AP	19	Ⅱc上	e	a	4.75	4.75	0.86	0.68	1.50	1.10	0.14	0.20	N 2° W	-	SD3 SK12 SK13 SK16	H6 D1
SD2	AP	19	Ⅲ上	c	a	(2.47)	(2.47)	(0.28)	(0.13)	-	-	0.38	-	N 90° W	-	-	-
SD3	A0 AP	18 19	Ⅲ上	c	a	6.30	6.00	1.74	0.62	1.83	0.76	0.50	0.50	N 42° W	SD1	-	H12 P2

表11 土坑一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形状	堆積状況	底面形状	断面形状	長軸長(m)		短軸長(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西						上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK1	A0	17	Ⅲ上	楕円形	c	楕円形	Ⅵ	0.62	0.47	0.44	0.34	0.14	N 15° E	SK5	-	H2
SK2	A0	17	Ⅲ上	楕円形	a	円形	I	(0.39)	0.22	0.31	0.21	0.13	N 75° E	SK6	-	-
SK3	A0	17	Ⅲ上	円形	d	円形	Ⅳ	(0.34)	0.25	0.32	0.21	0.14	-	-	-	-
SK4	A0	17	Ⅲ上	円形か	a	円形か	I	0.31	0.15	(0.19)	(0.08)	0.12	-	-	-	-
SK5	A0	17	Ⅲ上	円形	a	円形	I	0.36	0.23	0.33	0.21	0.11	-	-	SK1	-
SK6	A0	17	Ⅲ上	円形	a	円形	Ⅳ	0.27	0.19	0.24	0.17	0.07	-	-	SK2	-
SK7	A0	17 18	Ⅲ上	円形	a	楕円形	Ia	0.41	0.30	0.35	0.25	0.07	N 9° E	-	-	-
SK8	A0	17	Ⅲ上	円形	a	円形	I	0.28	0.16	0.24	0.16	0.11	-	-	-	-
SK9	A0	18	Ⅲ上	円形	a	楕円形	Ⅳ	0.34	0.26	0.30	0.19	0.07	N 43° E	-	-	-
SK10	A0	18	Ⅲ上	円形	a	円形	I	0.25	0.15	0.22	0.13	0.06	-	-	-	-
SK11	A0	18	Ⅲ上	円形	a	円形	Ⅵa	0.47	0.37	0.43	0.34	0.06	-	-	-	-
SK12	A0	19	Ⅲ上	円形	a	円形	Ⅳa	0.50	0.40	0.48	0.38	0.07	-	SD1	-	-
SK13	A0	19	Ⅲ上	楕円形	b	楕円形	I	0.45	0.35	0.28	0.17	0.10	N 16° W	SD1	-	-
SK14	A0	19	Ⅲ上	楕円形か	d	楕円形か	I	0.60	0.42	(0.45)	(0.20)	0.45	-	-	SB1-P4	-
SK15	A0	19	Ⅲ上	長方形	e	長方形	Ⅳ	(0.92)	(0.86)	(0.68)	(0.56)	0.38	N 30° W	SB1-P1	-	-
SK16	A0	19	Ⅲ上	方形	a	方形	Ⅶ	(0.76)	(0.72)	0.64	0.60	0.30	N 72° E	SD1 SB1-P2	-	-
SK17	A0	19	Ⅲ上	方形	a	方形	Ⅶ	(0.72)	(0.60)	0.68	(0.64)	0.22	N 60° E	SB1-P3	-	-

表12 出土遺物観察表(1)

掲載番号	種別	器種	出土区・グリッド	遺構番号	層	口径底径器高(cm)	口縁部残存率(x/12)	胎土	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他	挿図番号	図版番号
1	土師器	甕	A019	SB 1-P 2	a	- - (2.7)	1.0	密(径1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	10YR7/3 10YR8/2 10YR8/2	横ハケ後横ナデ/横ナデ	甕A類	口縁部外面に凹線1条内外面に煤付着	13	3
2	土師器	甕	A019	SB 1-P 2	b	- - (10.0)	-	密(径1mm以下の赤色酸化土粒をわずかに含む)	良好	10YR7/3 10YR7/3 10YR7/3	ヘラケズリ/縦ハケ	甕A類	体部内面上半に煤付着	13	3
3	土師器	甕	A019	SB 1-P 3	1	(19.1) - (2.5)	1.0	密(径1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	7.5YR6/2 7.5YR6/2 10YR7/4	横ハケ・横ナデ/斜めハケ・横ナデ	甕A類	口縁外面に沈線1条内外面及び断面に鉄分がわずかに沈着	13	3
4	土師器土製品	管状土鍾	A019	SD 1	a	2.0 - (4.3)	-	密(径1mm以下のチャートをわずかに含む)	良好	10YR8/1 10YR8/1 10YR5/1	棒による穿孔/指オサエ	-	径8mmの棒状工具による穿孔外面に黒斑あり使用痕不明瞭	15	3
5	須恵器	坏蓋	A018	SD 3	c	(13.0) - (1.6)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	坏蓋A類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	口縁部外面に自然釉使用痕不明瞭	16	3
6	須恵器	高坏	A019	SD 3	a	- - (11.0) (2.5)	-	密(径2mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ 5Y5/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	猿投 7世紀前半代	脚裾部外面に使用痕あり	16	3
7	土師器	甕	A018	SD 3	4	(17.7) - (4.1)	1.9	密(径1mm以下の長石・チャート・雲母をわずかに含む)	良好	10YR7/4 10YR7/3 10YR8/2	斜めハケ後ナデ・横ハケ/横ナデ	甕A類	内外面及び断面に鉄分沈着	16	3
8	土師器	甕	A018	SD 3	c	(20.3) - (9.3)	2.2	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR8/3 10YR7/3 10YR8/3	横ハケ後横ナデ・ヘラケズリ/横ナデ・縦ハケ	甕A類	使用痕不明瞭煤付着なし	16	3
9	土師器	製塩土器	A018	SD 3	c	(6.1) - (1.5)	1.5	密(径0.5mm以下の長石をわずかに含む)	普通	5YR6/3 5YR4/4 5YR6/6	ナデ/指オサエ	美濃式1類 7世紀中葉~末	被熱により表面に細かな亀裂多数	16	3
10	土師器	甕	A017	SK 1	b	- - (5.4)	-	密(径1mm以下の長石・雲母をわずかに含む)	良好	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/2	横ハケ/縦ハケ	甕A類	煤の付着不明残存部の推定体部径26cm	17	3
11	須恵器	坏蓋	A018	-	II b	(10.0) - (2.8)	1.6	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ・ヘラ起こし未調整	坏蓋A類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	屈曲部外面に使用痕あり	18	3
12	須恵器	坏身	A018	-	II b	(12.4) - (2.9)	2.0	密(径3mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N6/ N7/ N6/	回転ナデ/回転ナデ・ヘラケズリ・回転ナデ	坏身A類 TK217 7世紀前半代	使用痕不明瞭	18	3
13	須恵器	坏身	A018	-	II b	(9.4) - (3.0)	3.5	密(径2mm以下の長石・黒色土粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/2 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ	坏身A類 美濃須衛III-2 7世紀中葉	体部外面に自然釉口縁部内面に使用痕あり	18	3
14	須恵器	坏身	A019	-	II c	(8.8) - (2.1)	2.1	密(砂粒を含まず)	良好	10YR7/1 10YR7/1 10YR7/1	回転ナデ/回転ナデ	坏身A類 美濃須衛III-2 7世紀中葉	体部外面に使用痕あり	18	
15	須恵器	坏蓋	A018	-	II b	(12.8) - (1.5)	1.4	密(1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ナデ・ヘラケズリ	坏蓋B類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	天井部外面に自然釉天井部内面に墨書あり	18	4・5
16	須恵器	坏蓋	A018	-	II c	- - (2.4)	-	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ナデ・ヘラケズリ	坏蓋C類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	ツマミ部径3.4cm天井部内面に顕著な使用痕あり	18	4
17	須恵器	坏蓋	A018	-	II b	(24.0) - (2.3)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y6/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ナデ・ヘラケズリ	坏蓋C類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	口縁部外面に自然釉使用痕不明瞭	18	4
18	須恵器	坏蓋	A018	-	II b	(17.0) - (1.7)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y6/2 2.5Y6/2	回転ナデ/回転ナデ・回転ナデ・ヘラケズリ	坏蓋C類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	体部外面に自然釉内面に使用痕あり	18	
19	須恵器	坏蓋	A019	-	II c	(18.0) - (1.7)	1.0	密(砂粒を含まず)	良好	5Y6/1 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	坏蓋C類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	内外面とも使用痕あり	18	
20	須恵器	坏蓋	A018	-	II b	15.1 - 3.1	5.9	密(径1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	7.5Y7/1 7.5Y7/1 7.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ナデ・ヘラケズリ	坏蓋C類 美濃須衛IV-1 8世紀初頭	ツマミ部径3.5cmツマミ部端部に使用痕あり	18	3
21	須恵器	坏蓋	A017	-	II b	(15.8) - (2.2)	2.5	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転ナデ・回転ナデ・ヘラケズリ	坏蓋C類 美濃須衛IV-1 8世紀初頭	天井部外面に沈線1条体部外面に使用痕あり	18	4

表13 出土遺物観察表(2)

掲載番号	種別	器種	出土区・グリッド	遺構番号	層	口径 底径 器高 (cm)	口縁部 残存率 (x/12)	胎土	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	器面調整 内面/外面	分類・時期	文様・その他	挿 番 号	図 版 番 号
22	須恵器	坏蓋	表土掘削	-	IIb	(17.0) - (1.5)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 10YR7/1 10YR7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏蓋C類 美濃須衛IV-3 8世紀後半	使用痕不明瞭	18	4
23	須恵器	坏身	A018	-	IIc	(8.7) (6.1) (3.4)	2.6	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ 5Y4/1 N7/ N7/	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B類 猿投I41 7世紀末	口縁部内面に使用痕あり	18	4
24	須恵器	坏身	A018	-	IIc	(9.0) (6.7) (3.8)	1.7	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 7.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B類 猿投I41~C2 7世紀末~8世紀初頭	口縁部内外面に使用痕あり	18	4
25	須恵器	坏身	A018	-	IIc	(11.0) - 2.9	2.3	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B又はC類 猿投I41~C2 7世紀末~8世紀初頭	内外面とも使用痕あり	18	4
26	須恵器	坏身	A019	-	IIc	(9.0) - (2.3)	1.0	密(径3mm以下の長石をわずかに含む)	良好	5Y5/2 5Y5/1 10YR7/2	回転ナデ/回転ナデ	坏身B又はC類 猿投 7世紀代	口縁部外面に沈線1条 口縁部内面に自然軸 内外面とも使用痕あり	18	
27	須恵器	坏身	A018	-	IIb	(10.6) - (2.7)	1.0	密(径2mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B又はC類 猿投 8世紀代	内外面とも使用痕あり	18	
28	須恵器	坏身	A018	-	IIc	(10.8) - (2.9)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y6/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	坏身B又はC類 猿投 8世紀代	内外面とも使用痕あり	18	
29	須恵器	坏身	A018	-	IIb	(14.4) (10.0) 4.6	2.6	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	普通	2.5Y7/1 2.5Y5/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身C類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	体部内面に沈線1条 内面に顕著な使用痕あり	18	3
30	須恵器	坏身	A018	-	IIc	(15.9) - (3.9)	1.5	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/1 10YR7/1 10YR7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B又はC類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	内外面とも使用痕あり	18	
31	須恵器	坏身	AP17	-	IIb	(14.0) - (3.6)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	坏身B又はC類 美濃須衛III-3 7世紀後葉	内面に顕著な使用痕あり	18	
32	須恵器	坏身	A018	-	IIb	(17.6) - (3.8)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	不良	2.5Y7/2 2.5Y7/2 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B又はC類 美濃須衛III-3~IV-1 7世紀後葉~8世紀初頭	内面に顕著な使用痕あり	18	4
33	須恵器	坏身	A017	-	IIb	(16.0) - (3.0)	2.1	密(径1mm以下の長石・黒色上粒をわずかに含む)	不良	10YR7/1 10YR7/1 10YR7/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B又はC類 美濃須衛III-3~IV-1 7世紀後葉~8世紀初頭	内面に顕著な使用痕あり	18	4
34	須恵器	坏身	A019	-	IIc	(16.9) - (2.9)	2.5	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N6/ N7/	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身B又はC類 美濃須衛III-3~IV-1 7世紀後葉~8世紀初頭	使用痕不明瞭	18	4
35	須恵器	坏身	A018	-	IIb	- 7.6 (1.1)	-	密(径4mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/ヘラ切り・回転ナデ	坏身B類 美濃須衛III-3~IV-1 7世紀後葉~8世紀初頭	底部内面に顕著な使用痕あり	18	4
36	須恵器	坏身	A018	-	IIc	(16.1) (11.6) 4.9	1.0	密(径1mm以下の長石・黒色上粒をわずかに含む)	良好	5Y6/1 5Y6/1 5Y6/1	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身C類 猿投I41~C2 7世紀末~8世紀初頭	底部内面に顕著な使用痕あり	18	4
37	須恵器	坏身	A019	-	IIc	(16.0) - (2.8)	1.4	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	普通	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転ナデ・回転ヘラケズリ	坏身C類 美濃須衛III-3~IV-1 7世紀後葉~8世紀初頭	体部外面に沈線1条 内外面とも使用痕あり	18	4
38	須恵器	高坏	AP17	-	IIb	(10.6) - (2.0)	1.0	密(砂粒を含まず)	良好	5Y8/1 5Y6/1 5Y8/1	回転ナデ/回転ナデ	無蓋高坏 猿投 7世紀中葉~8世紀代	内外面とも使用痕あり	19	4
39	須恵器	高坏	A019	-	IIc	- - (6.4)	-	密(径1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	7.5Y7/1 7.5Y6/1 7.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛III-2~III-3 7世紀中葉~後葉	脚内面に縦方向沈線1条 外面に使用痕あり	19	4
40	須恵器	平瓶	A019	-	IIc	(6.7) - (4.1)	1.5	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y5/1 N7/ N7/	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛III-1 7世紀前葉	口縁部外面に沈線2条 使用痕不明瞭	19	4
41	須恵器	平瓶	A018	-	IIb	- - (1.5)	-	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	ナデ・回転ナデ/ナデ・回転ナデ	美濃須衛III-1 7世紀前半	体部天井部閉塞痕あり 外面自然軸 使用痕不明瞭	19	4
42	須恵器	提瓶	A017	-	IIb	- - (16.1)	-	粗(径1mm以下の長石・石英を多く含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ・ナデ//回転ナデ・回転ヘラケズリ	産地不明 6世紀後半代	肩部外面に自然軸 使用痕不明瞭	19	4

表14 出土遺物観察表(3)

掲載番号	種別	器種	出土区・グリッド	遺構番号	層	口径底径器高(cm)	口縁部残存率(x/12)	胎土	焼成	色調(内面/外面/断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他	挿入番号	図版番号
43	須恵器	甕	A018	-	II b	(18.1) - (4.0)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛III-2~III-3 7世紀中葉~後葉	口縁部外面に使用痕あり	19	4
44	須恵器	甕	A018	-	II b	(20.0) - (3.4)	1.1	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛III-2~III-3 7世紀中葉~後葉	口縁部内面に顕著な使用痕あり	19	4
45	須恵器	甕	A018	-	II b	(19.0) - (2.5)	1.0	密(砂粒を含まず)	良好	5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛III-3~IV-1 7世紀後葉~8世紀初頭	内外面とも顕著な使用痕あり	19	4
46	土師器	坏身	A019	-	II c	(11.0) (5.4) 2.8	1.0	0.5mm以下の長石・黒色土粒をわずかに含む	良好	7.5YR6/4 7.5YR6/6 7.5YR7/4	横ハケ後横ミガキ/横ミガキ・ナデ	畿内系土師器 飛鳥III 7世紀中葉~後葉	口縁部外面に沈線1条内面に顕著な使用痕あり	19	5
47	土師器	坏身	A018	-	II b	(12.8) - (1.9)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y6/6 2.5Y6/6 2.5Y6/6	ナデ・横ミガキ/ナデ・横ミガキ	畿内系土師器 飛鳥IV~平城II 7世紀末~8世紀初頭	内面に暗文か内外面とも使用痕あり	19	5
48	土師器	坏身	A019	-	II c	- (4.8) (1.5)	-	密(径1mm以下の赤色酸化土粒をわずかに含む)	良好	5YR7/4 5YR7/3 5YR8/2	横ミガキ/指オサエ後ナデ	畿内系土師器 飛鳥IV~平城II 7世紀末~8世紀初頭	内面に暗文あり底部内面に使用痕あり	19	5
49	土師器	皿	A018	-	II c	(20.0) - (1.5)	1.0	密(径1mm以下の石英をわずかに含む)	良好	2.5YR5/6 2.5YR5/4 2.5YR5/4	横ナデ/横ミガキ	畿内系土師器 飛鳥IV~平城II 7世紀末~8世紀初頭	内面に暗文あり口縁部外面に使用痕あり	19	5
50	土師器	皿	A017	-	II b	- (9.0) (1.4)	-	密(径0.5mm以下の長石をわずかに含む)	良好	5YR8/2 5YR4/6 5YR7/6	不明/不定方向のケズリ	畿内系土師器 7世紀末~8世紀初頭	底部外面に使用痕あり	19	5
51	土師器	高坏	A018	-	II b	- (10.0) (1.8)	-	密(径0.5mm以下の長石をわずかに含む)	良好	5YR6/6 5YR5/6 5YR6/6	布で覆った型作り/横ミガキ・ナデ	畿内系土師器 飛鳥IV~平城II 7世紀末~8世紀初頭	脚内面に布圧痕あり(型成形)脚裾外部面に使用痕あり	19	5
52	土師器	製塩土器	A019	-	II c	(4.0) - (2.5)	3.0	密(径1mm以下の石英・赤色酸化土粒をわずかに含む)	普通	7.5YR5/1 7.5YR8/4 7.5YR8/2	ナデ/指オサエ	美濃式1類 7世紀中葉~末	外面にわずかに煤付着	19	5
53	土師器	製塩土器	A018	-	II c	(5.3) - (1.5)	1.3	やや粗(径1mm以下の長石・石英を多く含む)	良好	5YR7/2 5YR5/1 5YR8/2	指オサエ/指オサエ	美濃式1類 7世紀中葉~末	外面に煤付着	19	5
54	土師器	製塩土器	A018	-	II b	- - (5.3)	-	密(径1mm以下の長石・赤色酸化土粒・雲母をわずかに含む)	良好	2.5YR5/6 2.5YR4/8 2.5YR4/8	不明/ナデ	知多・渥美式 棒状脚 7世紀後半~8世紀代	被熱により表面赤褐色化	19	5
55	土師器	製塩土器	A019	-	II c	- - (5.3)	-	密(径2mm以下の赤色酸化土粒をわずかに含む)	普通	- 2.5YR7/6 7.5YR8/6	不明/不明	知多・渥美式 棒状脚 7世紀後半~8世紀代	被熱により表面風化進行	19	5
56	土師器	製塩土器	A019	-	II c	- - (2.8)	-	密(砂粒を含まず)	良好	5YR7/6 5YR7/6	不明/不明	知多・渥美式 棒状脚 7世紀後半~8世紀代	被熱により表面風化進行	19	5
57	土師器	甕	A017	-	II b	(15.8) - (4.7)	1.1	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR5/3 10YR6/6 10YR7/3	ハ・ケズリ・横ハケ/横ナ・ハ	甕A類	内外面に煤付着 外面に鉄分沈着	19	5
58	土師器	甕	A017	-	II b	(18.0) - (4.7)	3.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/4 5YR6/6 10YR7/4	ハ・横ハケ/縦ハケ後横ナ・ハ	甕A類	煤の付着なし	19	5
59	土師器	甕	A018	-	II b	(20.0) - (3.5)	4.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	7.5YR7/4 7.5YR7/4 7.5YR7/4	ハ・横ハケ後ケズリ/横ナ	甕A類	口縁部端部の欠損部破面 摩耗 煤付着なし	19	5
60	土師器	甕	A019	-	II c	(17.4) - (7.6)	1.0	密(径2mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/4 10YR7/3 10YR7/3	ハ・横ハケ/横ナデ・縦ハ	甕A類	体部内外面にわずかに煤付着 口縁部端部に使用痕あり	19	5
61	土師器	甕	A019	-	II c	(17.0) - (3.2)	1.1	やや粗(径2mm以下の長石・石英をわずかに含む)	良好	5YR6/6 5YR6/6 5YR6/6	横ナデ・ケズリ/横ナデ	甕A類	口縁部外面に凹線1条 体部内外面に煤付着	19	5
62	土師器	甕	A017	-	II b	(21.8) - (2.3)	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/2 7.5YR7/3 10YR7/2	横ハケ後横ナデ/横ナデ	甕A類	煤の付着不明 端部外面に凹線2条	20	
63	土師器	甕	AP18	-	II c	(19.8) - (4.7)	2.0	密(径3mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/2	横ハケ後横ナデ・ケズリ/横ナデ・縦ハケ	甕A類	体部外面にわずかに煤付着	20	5

表15 出土遺物観察表(4)

掲載番号	種別	器種	出土区・グリッド	遺構番号	層位	口径底径器高(cm)	口縁部残存率(x/12)	胎土	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他	挿入番号	図版番号
64	土師器	甕	A019	-	IIc	(16.0) -	1.6	密(径1mm以下の長石・赤色酸化土粒をわずかに含む)	良好	10YR5/3 10YR6/3 10YR7/2	横ハケ後横ナデ・ケズリ/横ナデ・縦ハケ	甕A類	内外面にわずかに煤付着	20	
65	土師器	甕	A018	-	IIc	(13.8) -	3.0	密(径1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	10YR7/3 10YR8/3 10YR8/3	横ハケ後横ナデ・横ハケ/横ナデ・縦ハケ	甕A類	口縁部外面に凹線1条内外面に煤付着	20	5
66	土師器	甕	A018	-	IIc	(14.7) -	1.2	密(径1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	10YR6/2 10YR5/2 10YR8/3	横ナデ・ケズリ/横ナデ・縦ハケ	甕A類	口縁部外面に凹線1条体部外面に煤付着	20	6
67	土師器	甕	A019	-	IIc	(20.0) -	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	普通	10YR7/3 5YR7/4 10YR7/3	横ナデ・ケズリ/縦ハケ後横ナデ・縦ハケ	甕A類	口縁部外面に凹線1条煤の付着不明	20	
68	土師器	甕	AP18	-	IIc	(18.2) -	1.0	密(径1mm以下の赤色酸化土粒をわずかに含む)	普通	10YR7/2 10YR7/2 10YR7/2	横ハケ後横ナデ/縦ハケ後横ナデ	甕A類	煤の付着不明端部外面に凹線2条	20	
69	土師器	甕	A017	-	IIb	(22.3) -	1.3	密(径1mm以下の長石・赤色酸化土粒をわずかに含む)	良好	5YR7/6 5YR7/4 7.5YR7/4	横ハケ後横ナデ・ケズリ/縦ハケ後横ナデ・縦ハケ	甕A類	口縁部外面に凹線2条口縁部内外面を使用による摩耗あり	20	6
70	土師器	甕	A017	-	IIb	- -	-	密(径0.5mm以下の長石をわずかに含む)	良好	7.5YR6/2 7.5YR7/3 7.5YR4/1	横ハケ/縦ハケ・横ナデ	甕A類	外面に煤付着	20	6
71	土師器	甕	A018	-	IIb	(26.5) -	1.0	やや粗(径1mm以下の石英・赤色酸化土粒を多く含む)	良好	7.5YR8/2 7.5YR8/4 7.5YR8/2	横ハケ後横ナデ・ケズリ/横ハケ/横ナデ・縦ハケ	甕A類	外面に付着した煤がわずかに残存	20	6
72	土師器	甕	A018	-	IIb	(22.0) -	1.0	密(径1mm以下の赤色酸化土粒をわずかに含む)	不良	10YR8/2 10YR7/3 10YR8/2	横ナデ/横ハケ後横ナデ	甕A類	口縁部外面に凹線1条口縁部内外面摩耗	20	
73	土師器	甕	A018	-	IIb	(22.0) -	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/4 10YR7/4 10YR5/1	横ハケ後ナデ/ナデ	甕A類	口縁部外面に凹線1条口縁部内外面摩耗	20	6
74	土師器	甕	AP18	-	IIc	(20.0) -	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	普通	7.5YR6/4 7.5YR6/6 7.5YR7/4	ケズリ/横ナデ・縦ハケ	甕A類	口縁部外面が使用により摩滅煤の付着不明	20	
75	土師器	甕	A019	-	IIb	(16.0) -	1.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	7.5YR7/4 5YR7/4 10YR8/3	横ナデ/縦ハケ後横ナデ・縦ハケ	甕A類	煤の付着不明	20	
76	土師器	甕	A018	-	IIb	(22.9) -	1.1	密(径1mm以下のチャートをわずかに含む)	良好	10YR7/3 10YR8/3 10YR4/1	横ハケ後横ナデ・ケズリ/横ハケ/横ナデ・縦ハケ	甕B類	内外面に煤がわずかに付着	20	6
77	土師器	甕	A019	-	IIc	- -	-	密(径1mm以下の長石・チャートをわずかに含む)	良好	10YR7/4 10YR6/4 10YR7/2	ケズリ/縦ハケ	甕A類	外面に黒斑あり内面にコゲ痕跡あり	21	6
78	土師器	甕	A019	-	IIc	- -	-	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/2 10YR7/3 10YR7/2	縦方向ケズリ後ナデ/縦ハケ	甕A類	内面にコゲ痕跡あり推定体部最大径26cm	21	6
79	土師器	甕	A019	-	IIc	- -	-	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/2 10YR7/3 10YR7/2	縦方向ケズリ後ナデ/縦ハケ	甕A類	外面の一部が被熱により風化が進行	21	6
80	土師器	甕	A019	-	IIc	- -	-	密(径1mm以下の赤色酸化土粒をわずかに含む)	普通	10YR6/4 10YR7/4 10YR7/4	横ハケ/縦ハケ	甕A類	煤の付着不明	21	6
81	土師器	甕	A018	-	IIb	- -	-	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR5/2 10YR5/2 10YR5/2	横ハケ/縦ハケ	甕B類	外面に煤付着	21	6
82	土師器	甕	A019	-	IIb	- -	-	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR7/2 10YR6/2 10YR7/2	斜めハケ後ケズリ/縦ハケ	甕B類	外面に煤付着	21	6
83	土師器	甕	A018	-	IIb	- -	-	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR8/2 10YR6/2 10YR5/1	ケズリ/縦ハケ	甕A類	外面に煤付着	21	6
84	土師器	甕	A018	-	IIc	- -	-	密(径1mm以下の石英をわずかに含む)	良好	10YR7/3 10YR5/1 10YR5/1	ケズリ/格子状ハケ	甕A類	外面に煤付着外面が被熱により橙色(2.5Y6/8)に変色	21	6

## 第4章 総括

今回の発掘調査では、古墳時代後期から中近世にかけての遺構と遺物を確認した。これらのうち、本章ではSB1とSD3を中心に、過去の発掘区の遺構と合わせて検討する（調査年次毎に遺構番号を付与しているため、以下、年号の数字と遺構名を組み合わせで呼称し、令和3年度のSB1は「3\_SB1」という）。

### 1 掘立柱建物の属性

建物の構造・規模については、26\_SB1と26\_SB2では総柱建物（ともに2間×2間、26\_SB1は平面積約8.0m<sup>2</sup>）、26\_SB3・29\_SB5・3\_SB1の建物構造は不明であるが、他は側柱建物である。側柱建物のうち、29\_SB3・29\_SB4は2間×2間である。また、30\_SB6は北西辺に比べて南東辺の柱間が広く梁間と考えられ、北西辺のうちP2-P3とP3-P4間が均等であるのに対してP1-P2間がやや広い状況から、桁行5間×梁行2間（平面積約19.6m<sup>2</sup>、後述する平面指数65.4%）と推測する。29\_SB3と29\_SB4と29\_SB6はいずれも南北棟であるが、他は建物の向きは不明である。

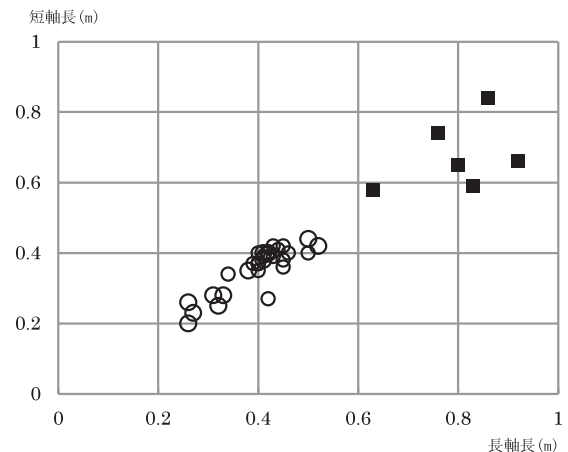


図23 掘立柱建物の柱掘方の規模

掘立柱建物の属性表（表16）のうち、柱掘方の規模（図23）をみると、29\_SB1と3\_SB1（■印）では長短軸長0.8m前後であるが、他の柱穴（○印）では長短軸長0.4m前後に集中する。両者の分布は明瞭に異なる。

表16 掘立柱建物の属性表

	柱掘方等の規模			柱掘方の形状				柱間		建物長軸方位	南北軸からの傾き
	長軸規模 (m)	柱痕跡 (m)	隅柱の掘方の深さ (m)	方形率 (%)	略方形率 (%)	円形率 (%)	不整形率 (%)	メートル法 (m)	唐尺 (高麗尺)		
26_SB1	0.34~0.50	0.18/0.20/ 0.21/0.21/ 0.23/0.23/ 0.24	0.2~0.32	0%	0%	80%	20%	1.46/1.23/1.38 /1.49/1.56/1.39	4.97/4.15/4.69 /5.04/5.29/4.70 (4.14/3.46/3.91 /4.20/4.41/3.91)	N-37° -W	18%
26_SB2	0.42~0.45	0.17	0.17~0.4	0%	0%	100%	0%	1.4	4.73(3.94)	N-53° -E	18%
26_SB3	0.22~0.26	—	0.12	0%	0%	100%	0%	—	—	N-63° -E	40%
29_SB1	0.63~0.86	<u>0.17/0.18/</u> <u>0.19</u>	0.6	0%	100%	0%	0%	1.90/ <u>2.13</u>	6.4/ <u>7.21</u> (5.37/ <u>6.01</u> )	N-36° -W	20%
29_SB2	0.26~0.66	—	0.14	0%	0%	100%	0%	—	—	N-13° -E	71%
29_SB3	0.38~0.52	<u>0.11/0.11/</u> <u>0.12</u>	0.15~0.2	0%	0%	100%	0%	<u>1.68/1.23</u>	<u>5.70/4.18</u> (4.75/3.48)	N-11° -E	76%
29_SB4	0.25~0.31	0.12	0.12~0.28	0%	0%	83%	17%	—	—	N-2° -W	96%
29_SB5	0.4~0.44	0.12/0.15/ 0.19/0.20	0.45	0%	0%	100%	0%	1.16/ <u>1.18/1.12</u>	3.92/ <u>3.98/3.81</u> (3.27/ <u>3.32/3.18</u> )	N-27° -W	40%
30_SB6	0.4~0.57	0.14/0.16/ 0.18/0.18/ 0.19/ <u>0.19</u>	0.53~0.61	0%	0%	100%	0%	<u>1.25/1.06/1.06</u> /1.87/1.72	<u>4.23/3.59/3.58</u> /6.33/5.82 ( <u>3.52/2.99/2.98</u> /5.27/4.85)	N-33° -W	27%
3_SB1	0.76~0.92	<u>0.16/0.18/</u> <u>0.21/0.22</u>	0.45	25%	75%	0%	0%	<u>1.29/1.93/1.86</u>	<u>4.37/6.54/6.31</u> ( <u>3.64/5.45/5.26</u> )	N-20° -W	56%

・「柱痕跡」と「柱間(メートル法)」のうち、下線部の数字は柱痕跡の平面を、下線部のない数字は柱痕跡の土層断面を各々計測した。

っておりその違いがどのような性格に拠るのかを明らかにする必要があるが、柱掘方の規模が1mに近いことから、豪族居宅又は郡(評)家を構成する建物の可能性も視野に入れて検討する。柱痕跡については、29\_SB3と29\_SB4では直径0.11m程度であるが、他の建物では直径0.15~0.2mである。ただし、柱痕跡と柱掘方の規模との明瞭な相関性はみられない。総柱建物2棟以外で各隅柱の掘方の深さを比較すると、0.15m程度と0.45m超のものがある。前者のうち29\_SB3と29\_SB4は2間×1間で、柱筋が通らない。26\_SB3や29\_SB2も柱掘方の深さから勘案すると、建物の規模としては29\_SB3と同等程度かもしれない。

柱掘方の形状<sup>1)</sup>については、29\_SB1と3\_SB1では略方形率が高いが方形率は低い。また、他の掘立柱建物では円形率が高い。

柱間<sup>2)</sup>については、26\_SB1では高麗尺・唐尺いずれにも拠らない。30\_SB6では高麗尺、29\_SB5では唐尺を各々用いた可能性もあるが、計測可能な柱間が限られるため判然としない。ただし、いずれの建物においても、柱間は不等間であることは明らかである。

丸杉俊一郎氏によると、東海地方の国庁・郡庁の可能性が高い建物群のうち、7世紀代の建物では、柱掘方の規模は1mを超えるものが少なく、方形以外の柱穴が主体で平面指数(梁行総長を桁行総長で除したもの)は高いが、7世紀後半から8世紀前半の評(郡)家の中枢部を構成する建物では、柱掘方の大規模化、高い方形率、平面指数の低下、柱筋の通りが良好で、その他官衙での建物群の多くは7世紀代の在地造営技術を引き継いでいるという<sup>3)</sup>。当遺跡における29\_SB1と3\_SB1は一部しか確認できなかったため、平面積や平面指数は不明であるが、少なくとも評(郡)家の中枢部を構成する建物の特徴とは合致しない。

## 2 掘立柱建物と他の遺構との関係

掘立柱建物の造営又は廃絶時期の推定に際して、柱穴出土遺物はある程度参考にはなるものの、確実な証拠にはなり得ない。そこで、掘立柱建物と関連する遺構の時期を検討した上で、遺構間の位置関係(図24)を確認し、改めて掘立柱建物の造営時期について推定する。

まず、調査地点間の主な溝の対応関係について検討する。過去の調査では、26\_SD10・SD13・SD26と30\_SD51、26\_SD11・SD12と30\_SD50は同一遺構と考えられており、今回の調査で検出した3\_SD3は29\_SD48と同一遺構の可能性が高い。ここでは遺構名が地点毎に異なり煩雑なため、以下、順に「溝A」、「溝B」「溝C」と呼称する。溝Aについては、30\_SD51が溝の幅・断面形の特徴が類似する29\_SD45に繋がる可能性があり、その西端の屈曲部でラミナが厚く堆積する状況から、南折して溝Cに接続すると考えられる。溝Aの東端については26\_SD26が26\_SB1・SB2・SB3を迂回して26\_SD43に接続すると推測する。溝Bについては、D地点以東では溝Aの南側に位置するがA・B・C地点では該当する溝は確認されていない。仮に溝Bが29\_SD42に繋がるとすると溝の底面が急勾配となるため、同一の溝である可能性は低い<sup>4)</sup>。溝Cについては、上記の推定から溝A・Bに供給すると考えられる水路で、集落域が広がる微高地の南西縁辺部に位置し、北東縁辺側の26\_SD41・SD43・SD45と対になる。

問題になるのは、これらの溝の掘削・埋没時期である。掘削時期については、溝A・Bがともに30\_SI19との重複関係から30\_SI19の廃絶(7世紀前半)以降であり、埋没時期については、溝Aでは埋土上層から出土した最新の須恵器の年代から、8世紀初頭にほぼ埋没したと考えられている。溝Bについては、7世紀後半以降の遺物が確認されていないことや溝Aを避けるように屈曲し上層にブロック混じりの土を含む状況から、溝Bが機能した期間は短かったと思われ、北隣の溝Aを掘削して生じた土により溝Bを埋め戻したと想定される<sup>5)</sup>。溝Cについては、埋土出土土器から6世紀末以降に掘削され7世紀中葉以降に埋

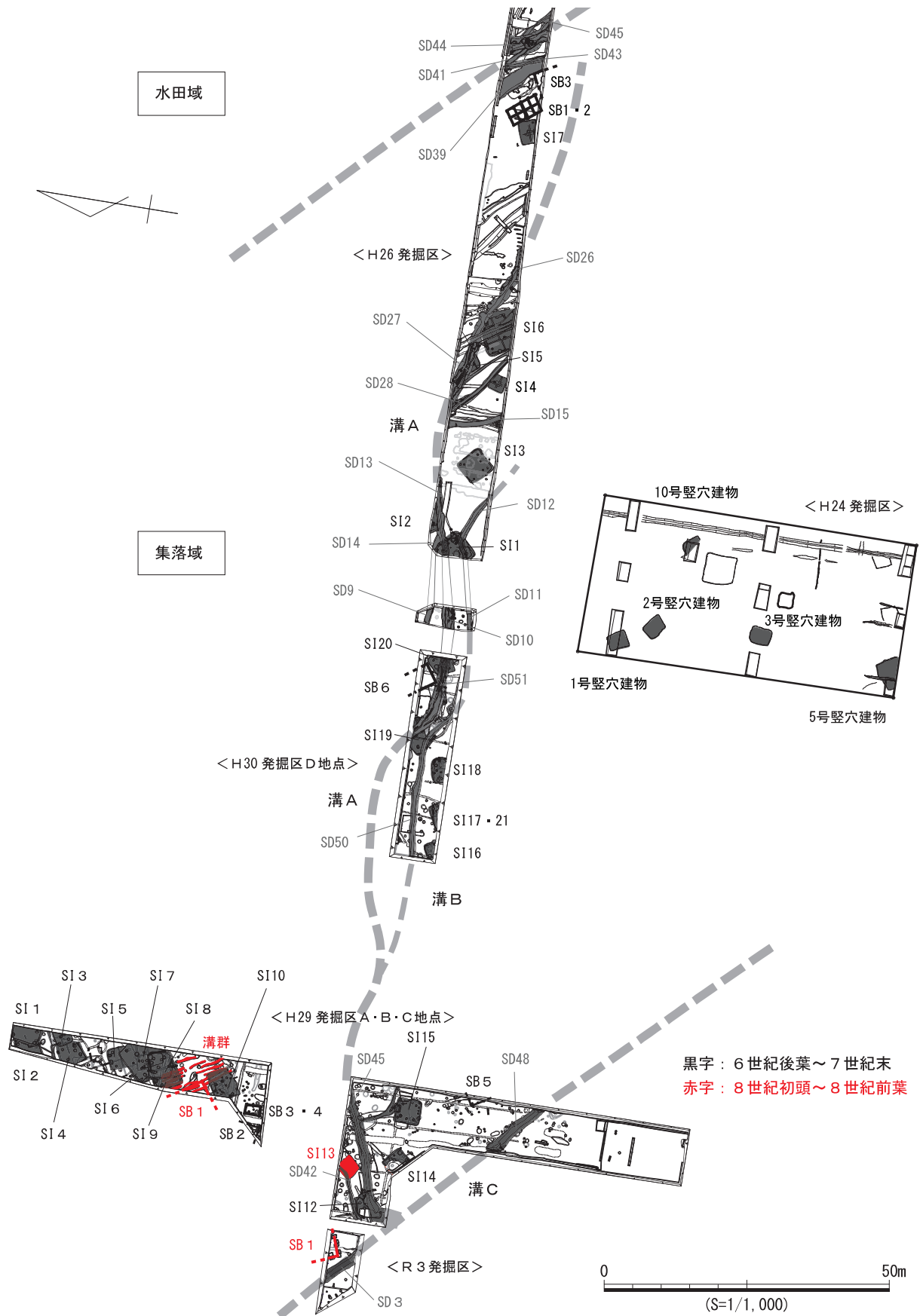


図24 古墳時代後期から奈良時代の土地利用状況

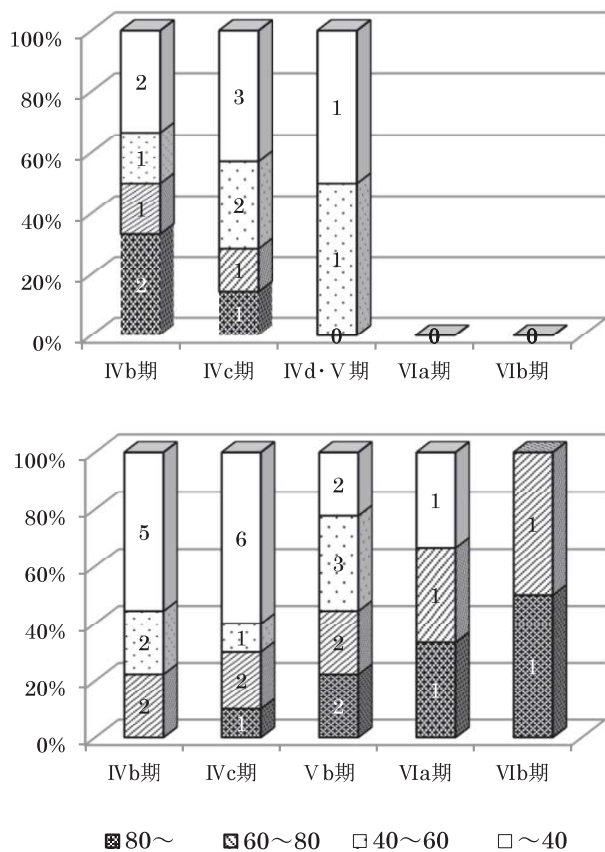


め戻されており、溝Aの水の供給元である溝Cの埋没時期も溝Aと同じ8世紀初頭の可能性がある。

次に、掘立柱建物と他の遺構との位置関係について確認する。30\_SB6と溝Aの関係について、30\_SB6のP4の最上層(黒褐色土)と30\_SD51北端の3層(黄灰色土)は明瞭に異なり、30\_SB6のP4は30\_SD51よりも古いとする発掘担当者の調査所見を踏まえ、30\_SB6は溝Aの掘削前に造営され廃絶したと考えられる。また、遺構の重複ではないが、29\_SB1と29\_SI9とは約1m、29\_SB1とSI10とは約0.4m、3\_SB1と3\_SD3とは約0.7mといずれも近接し、29\_SB1と29\_SI9・SI10、また3\_SB1と3\_SD3はいずれも同時併存は考えにくい。つまり、29\_SB1は29\_SI9の構築(7世紀前葉)より前か29\_SI10(7世紀後半に構築)の廃絶後のいずれか、また3\_SB1は溝Cの掘削前か埋没後のいずれかに各々造営されたと考えられる。しかし、今回の発掘区における遺物包含層(Ⅱ層)から出土した須恵器のうち、時期判別が可能な須恵器は7世紀後葉から8世紀初頭にかけてのものが主体であることから、3\_SB1が6世紀末を遡る可能性は低い。よって、29\_SB1と3\_SB1の造営は8世紀初頭に位置づけるのが妥当である。

### 3 竪穴建物と掘立柱建物の長軸方位

当遺跡とその東側に位置する稲荷遺跡では、掘立柱建物よりも竪穴建物の確認数が圧倒的に多いため、まず両遺跡の竪穴建物の長軸方位の状況(図25)を概観しておきたい。ここでは岐阜県文化財保護センター



データラベルの数値は竪穴建物の軒数

図25 竪穴建物の長軸方位(上:六里遺跡A・B・C地点、  
下:六里遺跡D地点および稲荷遺跡)

2018の時期区分を用いて説明する<sup>6)</sup>。発掘区のうち、A・B・C地点とD地点以東では、長軸方位の南北軸からの傾き<sup>7)</sup>の傾向が異なるため、順に説明する。まず、A・B・C地点(図25上)においてIVb期(6世紀後葉)では80%超・60~80%・40~60%・40%未満が概ね同数であるが、IVc期(7世紀前半)では40%未満の割合が増える。なお、IVd期(7世紀後半)以降に80%超はなく、IVd期とV期(8世紀前葉~9世紀初頭)ともに各1軒ずつ確認されている。次に、当遺跡のD地点以東及び稲荷遺跡<sup>8)</sup>(図25下)について述べる。IVb期では40%未満が主体で80%超は確認されていない。Vb期(8世紀中葉~9世紀初頭)では80%超・60~80%・40~60%・40%未満が概ね同数であるが、VIb期(10世紀前半)では40%未満と40~60%の竪穴建物はなく80%超と60~80%が1軒ずつ確認されている。西濃地域では、VI期以降に南北軸に近い建物が増加する傾向であり<sup>9)</sup>、他の時期においては集落域が立地する微高地の向き(40%未満)と竪穴建物の長軸方位は必ずしも整合しておらず、一様ではない。

次に、掘立柱建物の長軸方位についても、竪

穴建物と同様に南北軸からの傾きにより比較する。まず 29\_SB3 と 29\_SB4 は 80%前後で建物規模・構造ともに類似し、29\_SB2 は建物規模が不明ではあるが柱掘方の特徴や長軸方位は 29\_SB3 と類似する。これらの建物は中世以降の溝の下で確認され、A・B・C 地点では堅穴建物の長軸方位が南北軸に近い時期は IVb 期又は IVc 期であるため、29\_SB2・SB3・SB4 はいずれも IVb 期又は IVc 期に位置づけて良いだろう。同じく IVb 期以降（V 期以降の理由がないものも含む。）の 26\_SB1・SB2・SB3、29\_SB5、30\_SB6 のうち 40%が 2 棟、40%未満が 3 棟、Va 期の 29\_SB1 では 40%未満、3\_SB1 では 40~60%である。

以上から、堅穴建物と掘立柱建物の長軸方位の違いは直ちに造営の時期差を示すものではなく、同一時期に多様な軸を持った建物が混在しつつ、時間の推移に伴ってその割合が増減するものと考えられる。

#### 4 出土遺物の様相

豪族居宅を抽出する際の指標となりうる遺物については「文字関係資料、須恵器の大甕や大量の食器、製塩土器、施釉陶器・仏具などの奢侈的遺物、工房関係遺物、腰帯具、馬具や武器・武具など」<sup>10)</sup>が挙げられており、郡衙については「文書行政に関するもの（硯、墨書土器、水注、木簡、印、刀子、物差など）、律令祭祀に関するもの（土馬、斎串、絵馬、形代など）、官人の衣服に関するもの（腰帯具や木沓、檜扇など）、施設に関わるもの（海老錠や大型の柱根、瓦、小鍛冶などの生産遺構など）のほか、集落と異なる土器組成を持つことなど」<sup>11)</sup>が挙げられている。

上記に掲げられた遺物のうち、当遺跡の発掘調査報告書（本書を含む。）では墨書土器 5 点、製塩土器 15 点、古代瓦 5 点（川原寺式軒丸瓦 1 点含む）、鉄滓 1 点が出土したと報告しているが、豪族居宅や郡（評）衙との関連を窺わせるような遺物の内容・数量とは言い難い。ただし、製塩土器と畿内系土師器の出土については注意を要する。美濃では塩の生産地から搬入された知多・渥美式製塩土器が 16 遺跡と志摩式製塩土器が 2 遺跡、搬入された粗塩を一般集落で再加工するために使用したと言われる美濃式製塩土器が 32 遺跡確認されている<sup>12)</sup>。西濃地域出土の知多・渥美式は美濃国分寺跡（大垣市）の 9 点がまとまった量と指摘されており、当遺跡出土の 6 点はそれに近い。また、当遺跡では畿内系土師器 18 点が出土している。畿内系土師器は、古墳、官衙あるいはその近接集落、寺院、通常の集落で確認され、「都城を意識した強い中央志向」<sup>13)</sup>を窺わせる遺物と評価されており、中央志向の高い一族が都風の食器を用いた食事や儀式を行ったものと推測されている<sup>14)</sup>。

#### 5 小結

以上の検討を踏まえて主な遺構の変遷について概観するとともに、今後の課題について整理する。

- ・ 6 世紀後葉から 7 世紀前半にかけては堅穴建物が主体で、堅穴建物に隣接して高床倉庫とみられる掘立柱建物（2×1 間程度）、堅穴建物が集中する地区から離れた位置に総柱建物（2×2 間）が点在する。この総柱建物は「集落内で特殊な役割を担った建物」<sup>15)</sup>と位置付けられ、溝 A と 26\_SD43 の合流地点に意図的に配置された可能性がある。遺跡内で、堅穴建物・掘立柱建物ともに建物の長軸方位に関して統一性は認められない。
- ・ 7 世紀後半の堅穴建物は現時点では 29\_SI10 しか確認されていないが、この遺構より離れた 30\_SD51 から当該期の須恵器が出土していることから、発掘区外に堅穴建物や掘立柱建物が展開すると思われる。
- ・ 8 世紀初頭に水路が埋め戻されて、略方形の柱掘方をもつ掘立柱建物 2 棟（29\_SB1・3\_SB1）が造営され、8 世紀代の堅穴建物も 1 棟（29\_SI13）確認されている。発掘区内では掘立柱建物の確認数は少ないため、これらが明確な官衙の配置をとるのか否か不明である。しかし、冒頭に述べた掘立柱建物の属性の傾向、

「圍繞施設」<sup>16)</sup> が認められないこと、豪族居宅・官衙関連遺物が出土していない状況を勘案すると、現時点では当遺跡の性格としては一般集落の範疇に留まると理解するのが妥当と思われる。

- ・当遺跡の動向は、7世紀後半の大隆寺の造営と連動する可能性もあるが詳細は不明であり、また8世紀前葉には集落は別の地に移転したとみられるが<sup>17)</sup>、どのような背景に由るものか明らかになっておらず、今後の課題である。

## 注

- 1) 柱掘方の形状は、西垣2017に基づいて分類（「方形」とは向かいあう辺の長さが等しく、隅は直角に近いもの。隅丸かどうかは問わない。長方形も含める。「略方形」とは、向かいあう辺二組のうちどちらか一組は長さが異なるもの、辺の曲線傾向が強いものなど、方形を意識しているが実際には方形にならないものをこれに含める。「円形」とは円形のもの、楕円形もこれに含める。「不整形」とは上記以外のもの。）した。
- 2) 柱間については、柱痕跡の位置（柱痕跡と考えられる土層堆積を含む。表中の下線部箇所）を把握した柱穴を対象に、遺構平面図上において柱真々でイラストレーターにより計測した。なお、唐尺は0.297m、高麗尺は0.356mとして換算した。
- 3) 丸杉2018 120-121頁
- 4) 溝の底面の勾配を計測すると、溝Aでは0.07~0.13%、溝Bでは0.1~0.17%、溝Cでは0.28%である。R30\_SD50とR29\_SD42を繋いだ場合の勾配は0.34%となり、溝A・Bの計測値と比べると不自然である。
- 5) 7世紀代の須恵器甕（掲載番号79）において、SD10とSD12で接合関係が認められる（岐阜県文化財保護センター2008表32）。
- 6) 図25は、岐阜県文化財保護センター2018表121と同センター2019表50を基に作成した。ただし、29\_SI11は長軸方位が同一であるため29\_SI5の所属時期（IVc期）に合わせ、30\_SI20は溝A以前（IVc期）とし、III期の1軒（24\_9号竪穴建物）と南北軸からの傾きが不明な3軒については除外した。また、複数の時期に跨る場合は折半した。
- 7) 表16・図25の「南北軸からのずれ」については、岐阜県文化財保護センター2018第2分冊p146に拠った。割合が高いほど方位が南北軸に近いことを示している。
- 8) 六里遺跡では、平成24年度大野町発掘区・平成30年度D地点・平成26年度発掘区においてIII期・IVb期・IVc期の竪穴建物、稲荷遺跡ではIVb期・Vb期・VIa期・VIb期にかけての竪穴建物が各々確認されている。稲荷遺跡のIVb期の1軒を除くと、六里遺跡ではIII期からIVc期、稲荷遺跡ではVb期からVI期にかけて集落が営まれたと言える。
- 9) 岐阜県文化財保護センター2018第2分冊 149頁
- 10) 山中・石毛2004p242
- 11) 雨森2017 85頁
- 12) 森2015 5・10頁
- 13) 横幕2000 69頁
- 14) 森2015 9頁
- 15) 岐阜県文化財保護センター2018第2分冊p164。山中2007によると、26\_SB1の平面積は比較的小型で、豪族居宅・集落ともに少数確認されている。この遺構が単独の場合には、建物の平面積からは少なくとも倉庫としての機能を果たすことは困難であり、発掘区外の遺構の状況を把握した後に、建物の性格を判断する必要がある。
- 16) 山中2007 124頁
- 17) 三水川右岸の里山稲荷神社遺跡でVa期（美濃須衛窯編年IV-1期）の美濃国刻印須恵器が採集されており、当該期に三水川右岸に集落が形成されていた可能性が指摘されている（岐阜県文化財保護センター2017 167頁）。

## 引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史 別冊 古代 猿投系』
- 雨森智美 2017「郡庁域の空間構成—西日本の様相—」『第20回 古代官衙・集落研究会報告書 郡庁域の空間構成』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 内堀信雄・井川祥子 1996「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕 そのデザイン」』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
- 大熊賢昭 1985「第1章 風土と生物」『大野町史 通史編』、大野町
- 大野町 1985『大野町史 通史編』
- 大野町教育委員会 2006『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』
- 大野町教育委員会 2009『大野町遺跡詳細分布調査報告書 資料（考古）編』
- 大野町教育委員会 2010『大野町史 増補編』
- 大野町教育委員会 2011『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』
- 大野町教育委員会 2013「大野町史跡条里跡（六里遺跡）の発掘調査」『平成25年度岐阜県発掘調査報告会 資料』、岐阜県文化財保護センター
- 小山正忠・竹原秀雄 2015『新版標準土色帖』、日本色研事業株式会社
- 各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』岐阜県 2003『岐阜県史 考古資料』
- 岐阜県 2003『岐阜県史 考古資料』
- 岐阜県教育委員会 2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第1集（西濃地区・本巣郡）』
- 岐阜県教育委員会 2007『改訂版 岐阜県 遺跡地図』
- 岐阜県文化財保護センター2018『六里遺跡・稲荷遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター2019『六里遺跡Ⅱ』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡 考察編』
- 城ヶ谷和広 1996「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕 そのデザイン」』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 新名強 2013「古代東海地方における製塩状況—伊勢の事例を中心に—」『第16回 古代官衙・集落研究会 報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 竹谷勝也 2011「第1章 調査の目的と背景」『大野町の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、大野町教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ
- 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』、真陽社
- 西垣彰博 2017「九州の郡庁の空間構成について」『第20回 古代官衙・集落研究会報告書 郡庁域の空間構成』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 林部均 1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』、第72巻1号
- 丸杉俊一郎 2018「東海地方における政庁造営技術の検討」『東海考古学展望』、東海考古学展望刊行会
- 森泰通 1997「東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐって—」『製塩土器の諸問

- 題「古代における塩の生産と流通」、『塩の会シンポジウム実行委員会  
森泰通 2015「古代東海地方における堅塩づくりの製塩土器」『塩の考古学Ⅱ』、山梨県考古学協会・帝京大  
学文化財研究所
- 山中敏史 2003「官衙建物の遺構」『古代の官衙遺構 I 遺構編』、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研  
究所
- 山中敏史・石毛彩子 2004「地方豪族居宅」『古代の官衙遺構 I 遺物・遺跡編』、独立行政法人文化財研究  
所奈良文化財研究所
- 山中敏史 2007「地方豪族居宅の建物構造と空間的構成」『古代豪族居宅の構造と機能』、独立行政法人国立  
文化財機構奈良文化財研究所
- 横幕大祐 2000「美濃・飛騨の畿内産土師器」『美濃の考古学』第4号、美濃の考古学刊行会
- 渡邊博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相―蓋坏の型式設定とその編年試案―」『美濃の考古学』創  
刊号、美濃の考古学刊行会
- 渡邊博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008 愛知県大会研究発表資料』、日本考古学協会  
2008年度愛知大会実行委員会



発掘区全景(南東から)



SD3完掘状況(南から)



SB 1 完掘状況 (南から)



SB 1-P 1 土層断面 (南から)



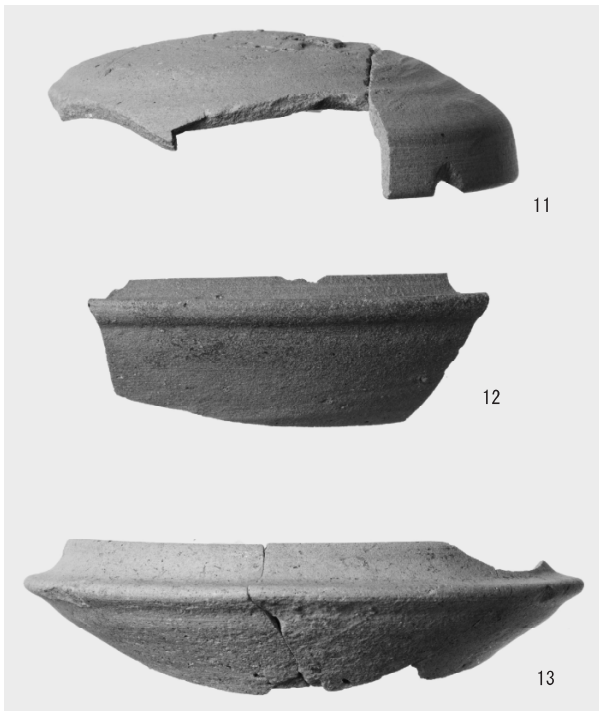
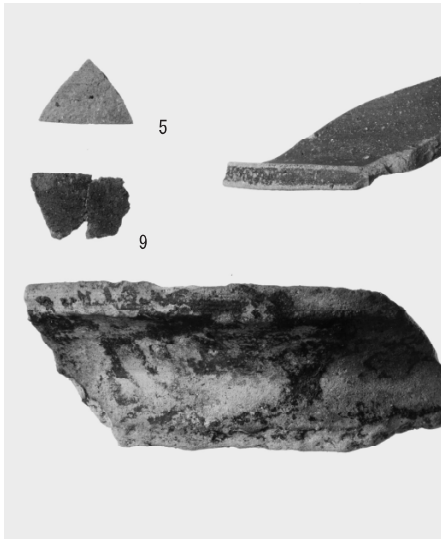
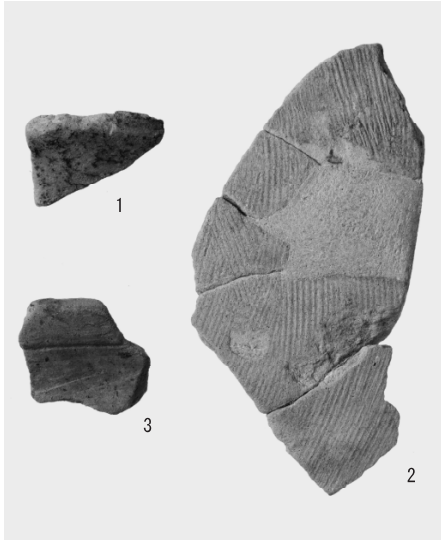
SB 1-P 2 土層断面 (南から)



SB 1-P 3 土層断面 (南から)

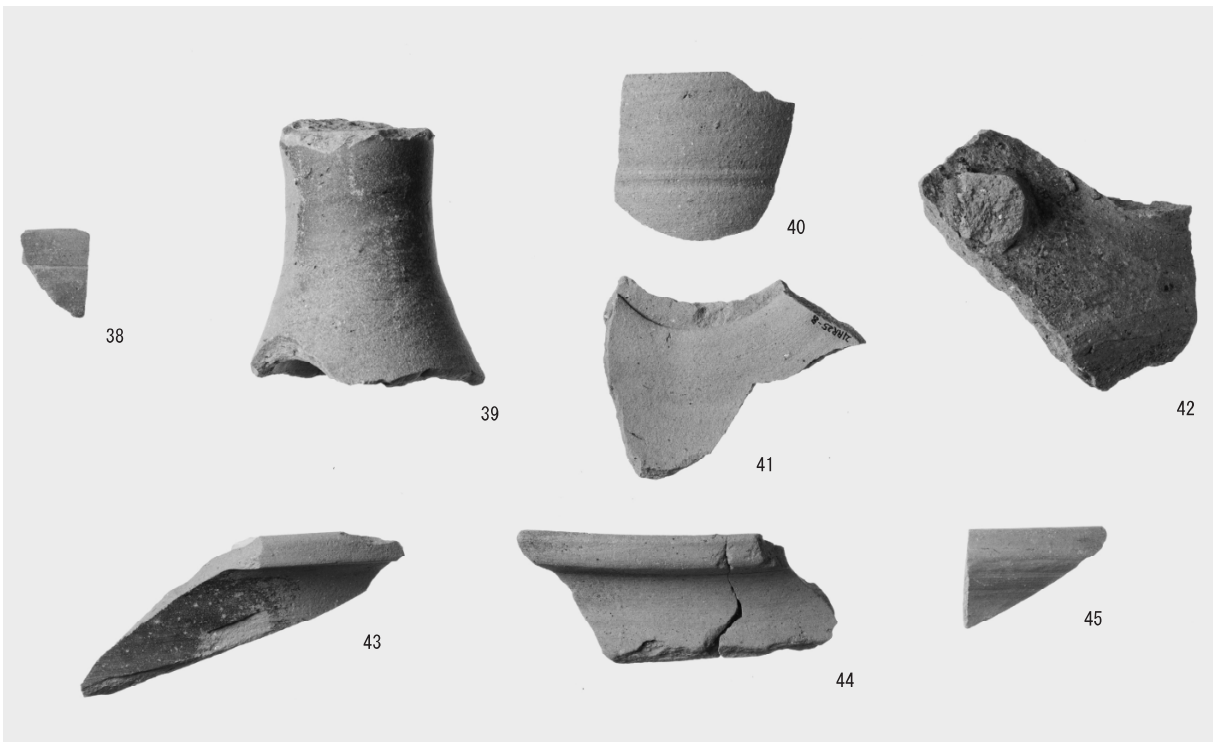
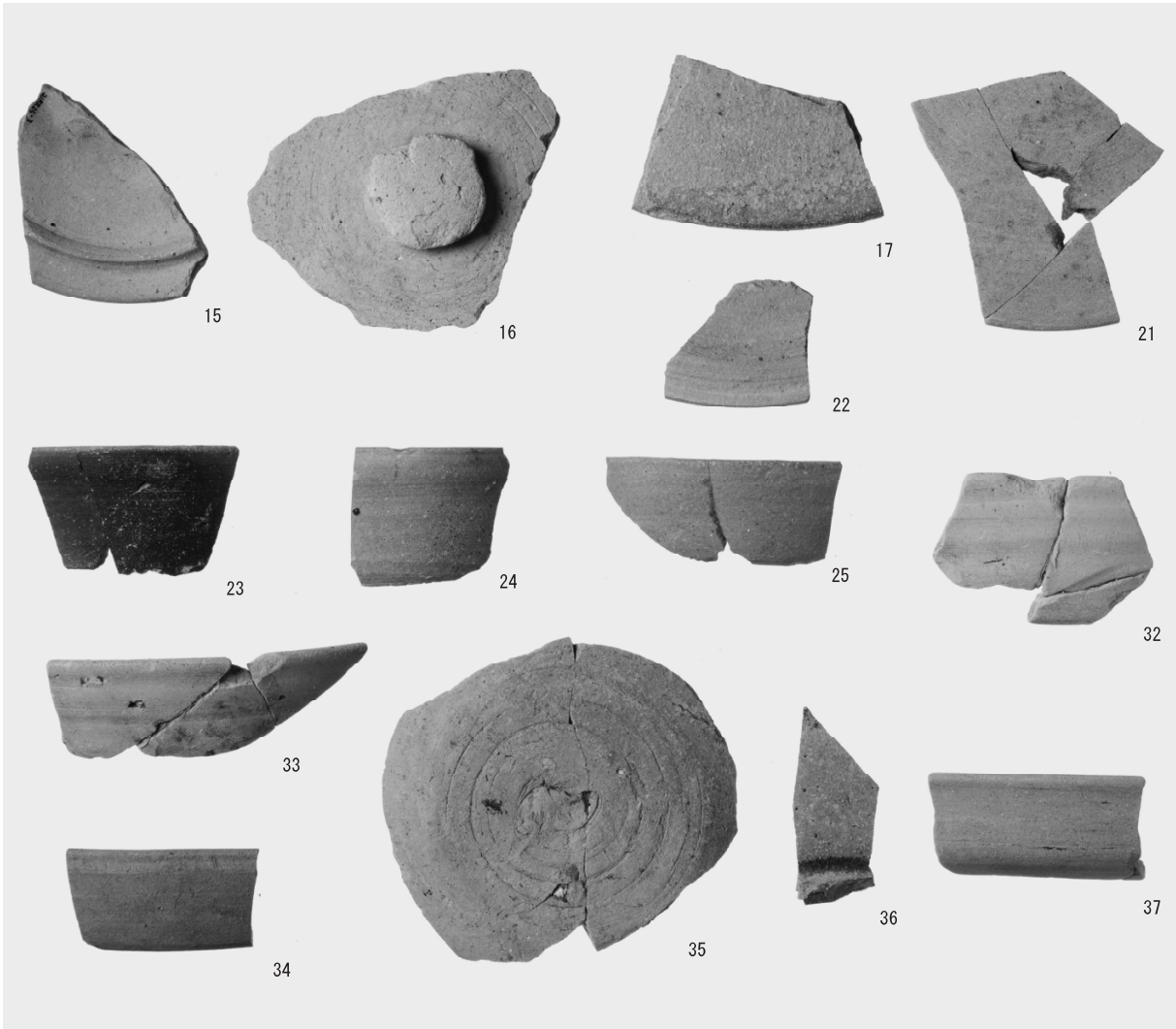


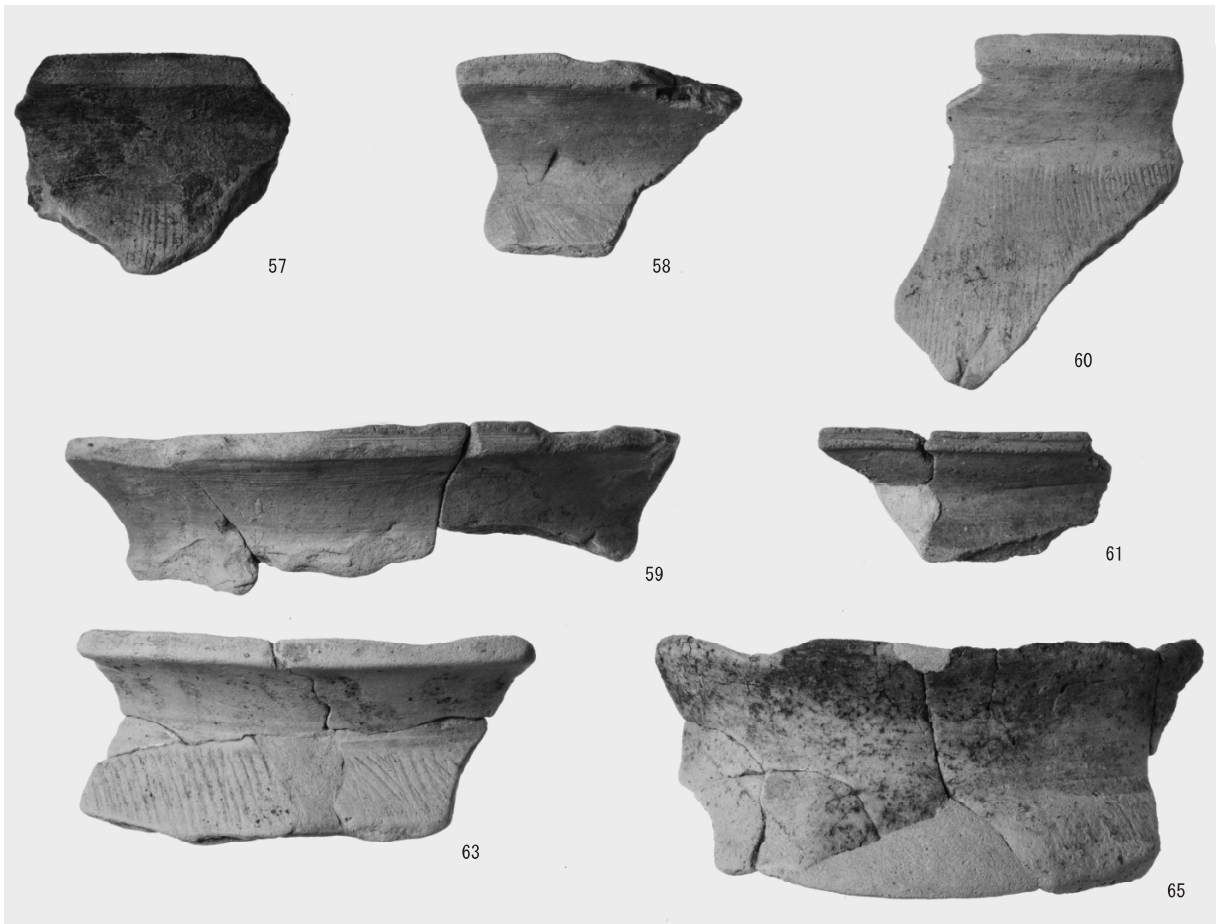
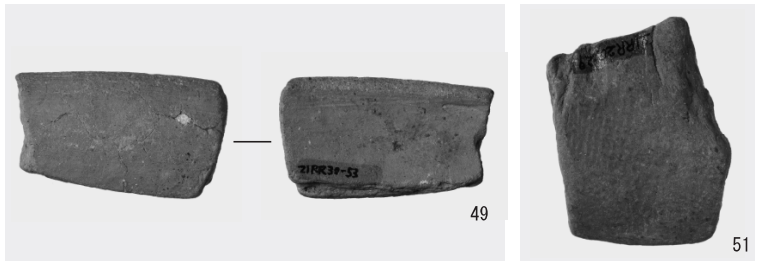
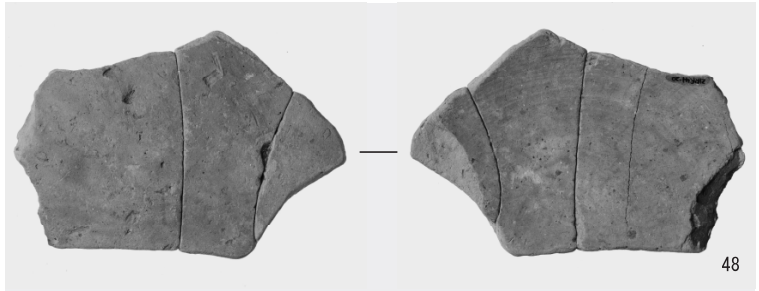
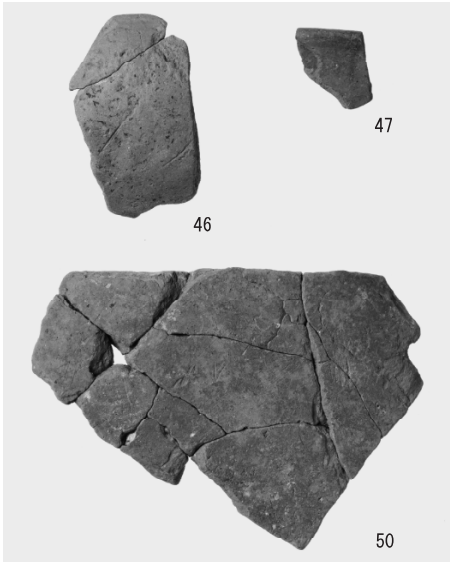
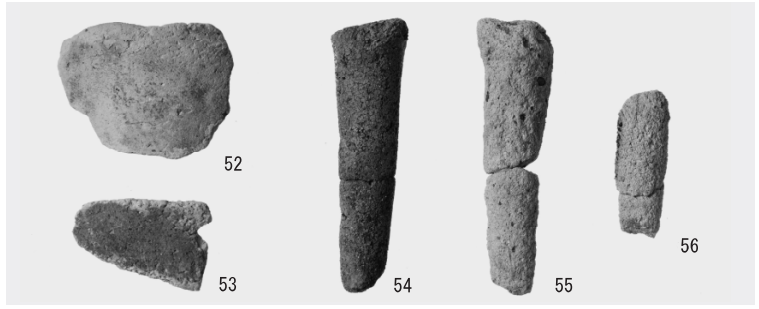
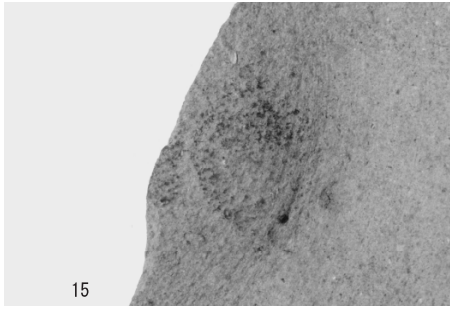
SB 1-P 4 土層断面 (南から)



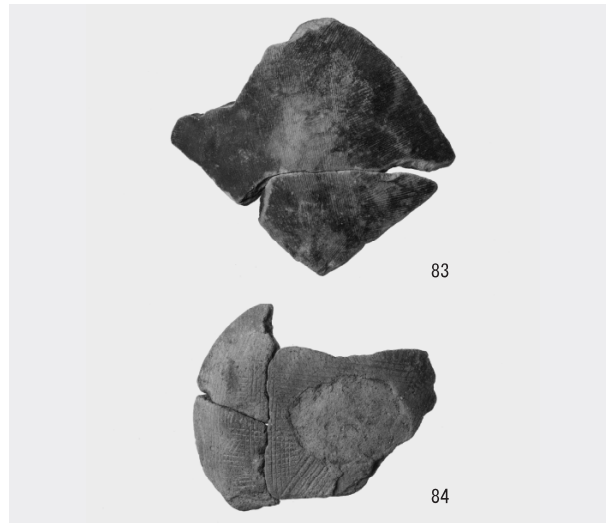
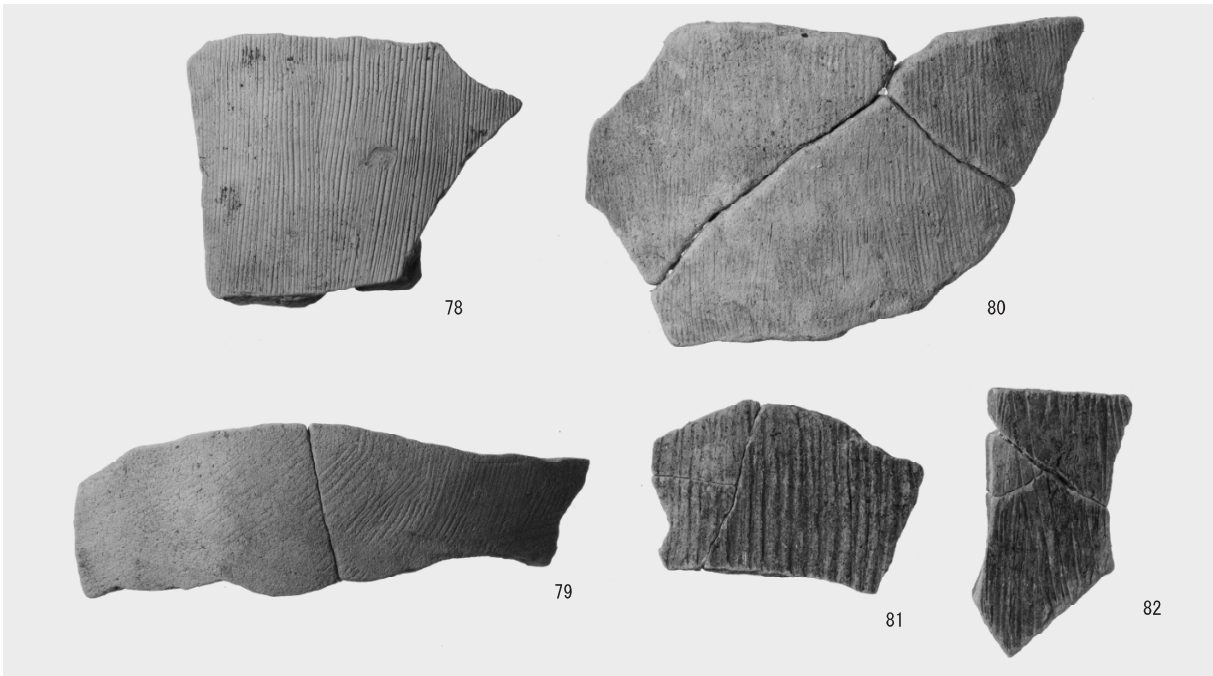
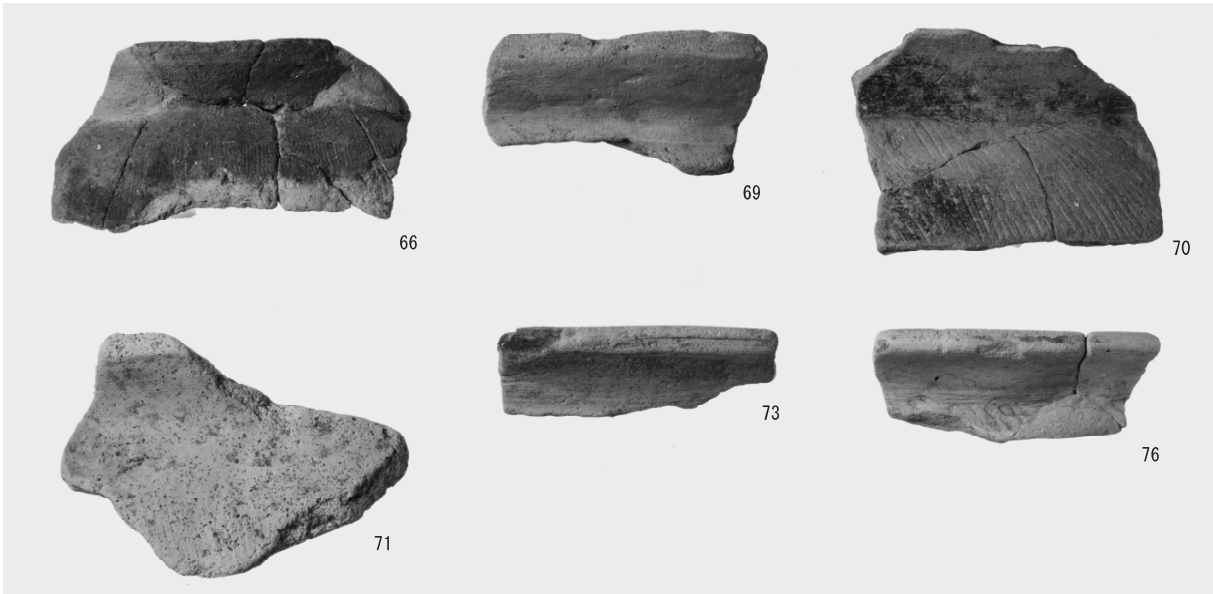


図版4 遺物(2)





图版6 遺物(4)



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ろくりいせき3							
書名	六里遺跡Ⅲ							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第158集							
編著者名	服部正宏・三輪晃三							
編集機関	岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL058-237-8550 FAX058-237-8551							
発行年月日	2023年3月3日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
ろくり 六里 いせき 遺跡	ぎふけん 岐阜県 いびぐんおおのちよう 揖斐郡大野町 こえび 小衣斐	市町村	遺跡番号	35° 27’ 42”	136° 37’ 38”	20210607 ～20210907	130.2	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
六里遺跡	散布地 集落 墓 その他の生 産遺跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	掘立柱建物 1棟 溝状遺構 3条 土坑 17基	土師器 995点 須恵器 133点 中近世陶磁器 5点 土製品 1点 鍛冶関連遺物 1点	古代寺院の大隆 寺跡に近接する 集落跡			
要 約	<p>六里遺跡は、揖斐川と根尾川に挟まれた扇状地に立地する。今回の調査では、6世紀から8世紀の遺構や遺物を確認した。主な遺構としては、略方形の柱掘方をもつ掘立柱建物と溝状遺構がある。出土遺物は、土師器・須恵器などの7世紀代のものが中心である。土師器の中には、暗文を施した畿内系土師器や製塩土器が含まれる。過去の調査成果と今回の遺構や遺物の様相から、古墳時代後期から古代にかけての当遺跡は一般集落としての性格であったと考えられる。</p>							

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第158集

## 六里遺跡Ⅲ

2023年3月3日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 株式会社もとすいんさつ

